

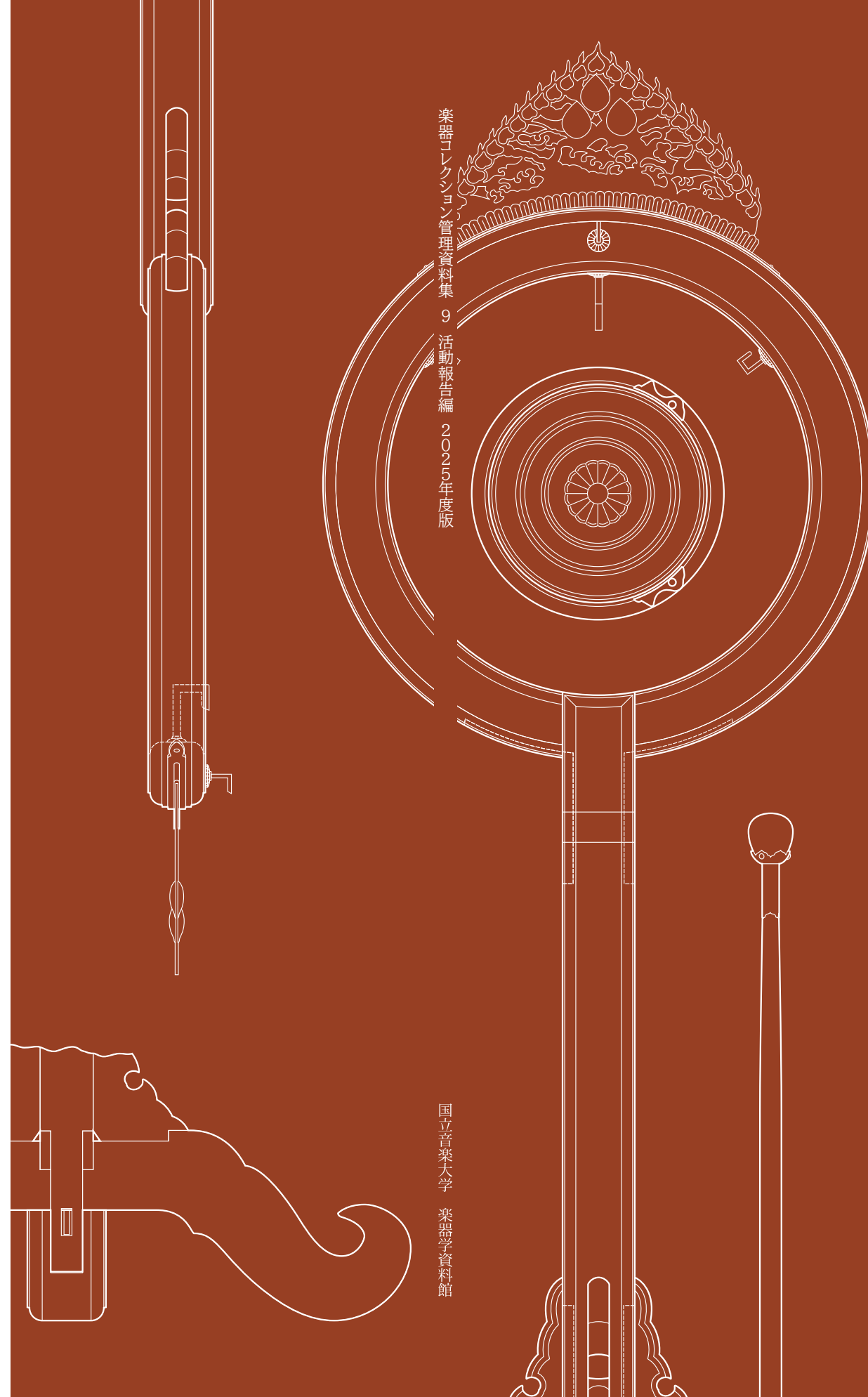
楽器コレクション管理資料集

9

活動報告編

2025 年度版

国立音楽大学 楽器学資料館



楽器コレクション管理資料集 9 活動報告編 2025年度版

国立音楽大学 楽器学資料館

楽器コレクション 管理資料集

9

活動報告編

2025 年度版

国立音楽大学 楽器学資料館

楽器コレクション 管理資料集

9

活動報告編 2025年度版

目次

---

まえがき	三浦 雅展 ……	p. 4
------	----------	------

---

第1部 楽器資料に関する記録		
1 くにおんフォルテピアノの製作について	太田垣 至 ……	p. 6
2 楽器学資料館データベースの情報補足作業に関する調査報告 —アフリカの楽器を中心に—	後閑 綾香 ……	p. 10

---

第2部 保存環境に関する記録		
3 楽器学資料館における文化財害虫の発生と対応	不動 真優 ……	p. 21
4 楽器学資料館における空調管理と湿度コントロール	不動 真優 ……	p. 30

---

第3部 資料管理に関する記録		
5 館内書棚の管理に関する報告	仲川 咲 ……	p. 35

---

第4部 活動報告		
6 レーザーターンテーブルの音質評価 —インパルス音数の予測—	三浦 雅展 ……	p. 41
7 国立音楽大学創立100周年記念事業「歴史的ピアノへのアプローチ ～くにおんフォルテピアノで新たな世紀へ～ プロジェクト」報告	宇井 紗也香 ……	p. 47
8 2025年度活動報告	武田 有里 ……	p. 59
9 2025年度の寄贈・購入資料	武田 有里 ……	p. 66

---

巻末 楽器学資料館 2025年度活動報告概略	……	p. 69
------------------------	----	-------

## まえがき

三浦 雅展

国立音楽大学楽器学資料館の年次報告書をお送りします。本報告書は、2025年度に当館にて実施した諸活動の概要を取りまとめたものでございます。

2025年度は、太田垣至先生の多大なるご尽力により、アントン・ワルター製フォルテピアノの複製が完成し、「くにおんフォルテピアノ」として公開することができました。本楽器は、2026年度に迎える国立音楽大学100周年を記念する事業の一環として製作したもので、今年度は先駆けて演奏会および各種公開イベントにおいて積極的に活用し、教育・研究両面において成果を挙げております。

また、当館では約2600点の所蔵資料のみならず、二次資料の体系的な整理作業を継続しており、本報告書にはその状況も収録しております。加えて、レコード盤の音源に関する長期保存を目的とした音質評価の研究にも取り組み、資料保存と音響研究の双方の観点について成果を得ております。

このほか、日常的な保全活動、展示活動、教育普及活動、ならびに新規寄贈資料の受け入れ状況等についても報告しております。

本報告書をご高覧いただき、当館の活動についてご理解を深めていただく機会となりましたら幸甚に存じます。今後とも、国立音楽大学楽器学資料館の活動に一層のご支援・ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

楽器コレクション 管理資料集

9

活動報告編 2025年度版

## 第1部

# 楽器資料に関する記録

くにおんフォルテピアノの製作について

太田 垣 至

国立音楽大学 100 周年事業の一環である「くにおんフォルテピアノ」の製作は 2022 年に企画がスタートし、2025 年 3 月末に予定通り完成させることができた。4 月に久元祐子先生によるお披露目コンサート、6 月にトマシュ・リッテル氏のコンサート、8 月にサマースクール、12 月には資料館所蔵のブロードウッド、グラーフとともに平井千絵先生のレクチャーコンサートが開催された。年度を通して楽器学資料館内での授業や試奏にも度々用いられた。

2022 年度の管理資料集に「くにおんフォルテピアノ」製作の背景や、その復元したアントン・ワルター作のフォルテピアノについて記した<sup>1</sup>。ワルターのフォルテピアノについてはそちらを参照されたい。

製作にあたり、故 森太郎先生が立ち上げられた、国立音楽大学校内で伐採した樹木を楽器として再生させる「くにたち未来プロジェクト」([https://www.kunitachi.ac.jp/introduction/kunion\\_cafe/production/index.html](https://www.kunitachi.ac.jp/introduction/kunion_cafe/production/index.html)) のために保管されていた材木の使用を検討するところから出発した。

ケヤキとイチョウが保管されていたが、簡易的な屋根はあるものの風雨にさらされる状態で保管されていたため保存状態は良いとは言えず、さらには製材時に短く切られていたため、楽器本体に用いるには難しかった。

楽器本体での使用は諦め、ケヤキを使い「くにおんフォルテピアノ」用の譜面台（写真 A）と椅子（写真 B）、膝ペダルのための脚台（写真 C）を製作することにした。



写真 A 譜面台



写真 B 椅子



写真 C 脚台

ワルター及び 18 世紀初頭ごろのウィーンのフォルテピアノは、ケースやその骨組みは主にスプルースで作られ（写真 1、2）、その上に厚さ 1 ミリ前後の突板（化粧板）が貼られることが多い。「くにおんフォルテピアノ」では突板にマホガニーを使用した。（写真 8）

その他の材料も、極力オリジナルのワルターに用いられた材種と同種、あるいはそれに近いものを準備した。

1 『楽器コレクション管理資料集 6 活動報告編 2022 年度版』6～8 ページの「アントン・ヴァルターの復元フォルテピアノ製作について」。

備した。

楽器本体の構造材にはスプルース、張力のかかる部分（ピン板やヒッチピンレール）にブナ、メイプルを用いた。

アクション関係では、ハンマーシャンクやホッパー（エスケープメント）、ダンパージャックにペアウッド、ハンマーヘッドにメイプル（最低音部のみ）とライムを、鍵盤表面には黒檀と牛骨を用いた。

ハンマーヘッドレザーやダンパーヘッドレザーには鹿革を用いた。（写真 D）

弦は替え弦の入手の利便性なども考慮し、鉄弦はマルコム・ローズのタイプ B を選択した。

ブラス弦、レッドブラス弦にもマルコム・ローズを使っている。



写真 D ハンマー

以下に、製作の記録写真を製作順に並べる。

底板に柱や構造材を立ち上げ、側板を取り付け、響板を貼り込み、箱状の本体が出来上がり、鍵盤とアクション部分が収まり、徐々に楽器が形になっていく様子が見て取れると思う。写真の作業工程は全体のうちのほんの僅かで、他にも無数の作業を積み重ねてフォルテピアノは作られる。「くにおんフォルテピアノ」は足掛け 2 年ほどの製作期間を要した。



写真 1 底板準備



写真 2 本体骨組み製作



写真 3 チューニングピンブロック接着



写真 4 ケース側板接着



写真 5 本体内部



写真 6 響板製作



写真7 響板裏



写真8 突板接着

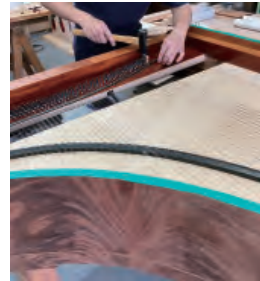


写真9 弦張



写真19 完成

楽器学資料館では国立音大生、および一般の方々にも、展示室公開日に度々試奏の機会が提供される。100年以上前に作られることのなくなったウィーン式アクションから奏でられる音色を聴くだけでなく、現代とは異なるフォルテピアノを実際に見て触れて、多くの人に体験していただきたい。

2025年度は100周年事業のプレイベントとして「くにおんフォルテピアノ」がたくさんの機会で行われた。今後も長く弾き継がれ、活躍することを願ってやまない。

楽器資料に関する記録



写真10 鍵盤製作



写真11 鍵盤フレーム製作

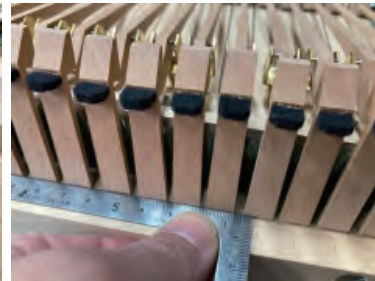


写真12 アクションパーツ(エスケープメント)製作



写真13 ハンマー製作



写真14 ダンパー設置



写真15 ニーレバー



写真16 脚製作



写真17 塗装



写真18 調整

## 楽器学資料館データベースの情報補足作業に関する調査報告

## —アフリカの楽器を中心に—

後閑 綾香

## 1. はじめに

楽器学資料館では、2021年度より「楽器学資料館 楽器データベース情報補足作業」として、研究プロジェクトを立ち上げ、資料館が所蔵する楽器資料の周辺調査を進めてきた（岩崎 2022）。本調査も、この研究プロジェクトの一環として実施したものであり、新たな情報収集を通して、各楽器の理解をより深めることを目的としている。

本稿の記述に関しては、まず用語の定義を以下のとおり定める。

- ・通称 M：『Musical Instruments-A Comprehensive Dictionary』（Sibyl Marcuse, 1975）に基づき記載されている名称
- ・通称 G：『The New Grove Dictionary of Musical Instruments』（Edited by Stanley Sadie, 1984）に基づき記載されている名称

これらは、楽器データベースの目録詳細において通称として用いられている楽器の名称であるが、本調査では上記の通称ではなく、現地で呼ばれている名称、すなわち地域名称についての調査を行う。

報告者は、2025年4月より、本学所蔵のアフリカの楽器を対象として、地域名称に関する調査を行い、既存のデータベースに基づく情報の検証および補完を進めてきた。なお、地域名称に関する検討は、名称を断定することを目的とするものではなく、今後の研究の基礎資料とすることを目的として、情報の収集および整理を行うものである<sup>1</sup>。本稿では、その調査結果を報告する。

## 2. 調査対象

外部公開用の「所蔵楽器データベース」、および資料館スタッフが日常の業務の中で作業を行う内部

1 地域名称に関して郡司すみ氏は、一つの楽器に付された名称は数十に達することも稀ではなく、楽器名の表記の仕方や諸民族の楽器がローマ字に置き換えられる過程で生じる違いは無数に存在するため、すべてを網羅することは不可能であると述べている。（郡司 1996：436）

用の資料管理・閲覧用データベースである「楽器苑」において「所蔵楽器目録検索条件」の地域名の欄<sup>2</sup>が「アフリカ」<sup>3</sup>となっている楽器を調査対象とした。両データベースに登録されている楽器の名称は、主に通称 M と通称 G<sup>4</sup> と地域名称<sup>5</sup> の項目に分けてそれぞれ記載されている。なお、アフリカで製作された楽器の場合、各楽器辞典に記載されている名称については、殆どの楽器に記載が確認されるのに対し、地域名称の欄は、空欄となっており、総称<sup>6</sup>または楽器辞典に記載されている名称のみデータベースに登録している楽器が大半であった<sup>7</sup>。

## 3. 調査手順および方法

上述したように、データベースには、資料館の所蔵楽器の名称が楽器の総称を含め各項目ごとに記載されている。そのため、地域名称の調査を行うにあたり、データベースの詳細目録に記載されている情報を確認したうえで、地域名称および周辺調査を行う必要がある。

そこでまず、データベースの所蔵楽器目録検索条件の地域名の欄を「アフリカ」に設定して検索を行った。検索条件には地域名を選択する項目のほかに、国名を具体的に設定して検索することも可能であるが、本調査では国別に調査を行うということに特段の意義が認められないため、地域名のみを条件として検索した。

次に、検索結果より地域名称の欄の記載の有無を確認し、地域名称の記載がない楽器については、目録に記載されている基本情報や各標本資料のメタデータ<sup>8</sup>などを主な手掛かりとして調査を進めた。

また、名称調査には、主として実物写真や図版がある出版物や文献、またはインターネット上の情報を参照した。出版物や文献に関しては、現地調査を行っていることに加え、写真または図録によって確認できるものを優先的に用いた。一方、インターネット上の情報については、博物館、資料館、美術館が公式で発表しているデータベースや研究者の精密な調査に基づくものと判断される楽器データベースを参考にした。さらに、上記の情報源から該当資料が得られない場合には、インターネットによる画像検索機能も用いた。画像検索を用いることによって、所蔵楽器に外観が類似するものについての情報を得ることができ、検索効率を高めることができるが、信憑性の低い情報も含まれているため、データ元の取り扱いには十分留意した。なお、学術的な研究としての根拠が明確でないといわれるサイト（例えばオークションサイトや個人のブログ）も活用し、今後の研究の一助になるよう、地域名称について知り

2 地域名については、データベース上の表記に基づいて「その楽器が製作された地域における名称」としている。なお、原語表記をローマ字表記に書き直したり併記している場合もある。

3 外部公開用の所蔵楽器データベースである楽器苑では「アフリカ Africa」と記載されている。

4 なお、これらの楽器辞典に見当たらない楽器については、総称が用いられている。また、日本語名称については、主に言語辞典を参考にしている。

5 地域名称（Regional name）とは、世界の諸民族が持つ楽器の名称のことを指す。

6 その楽器において、慣用されている名称を総称としている。

7 データベースに記載した地域名称は、その楽器が属する地域の国・公立博物館、資料館、研究機関等の出版から、該当する楽器が実物写真または図版によって確認されたものに限られている。

8 所蔵資料に関する情報のこと。本稿ではデータファイルに保存している資料のことをメタデータとしている。メタデータについては、宇井 2022：49 に詳しい。



を担う。シヨナ族のムビラは、チューニングを細かく指定したり、演奏される楽曲の音楽構造が複雑であったり、他のアフリカ諸国の一般的なラメラフォンとは一線を画す楽器とされている。また、シヨナ族のムビラの大きな特徴は、板の下部に数個のボトルキャップが取り付けられていることで、キーを弾いたときに共鳴するノイズ音は、奏者をトランス状態に入りやすくさせ、スピリットが降りやすくなるという効果があると考えられている。

【2118】のラメラフォンは、振動版（ラメラ）の数が26で、板の下部に4つのピンの蓋がとても緩く取り付けられている。実際に音を出してみると、ピンの蓋によるノイズ音が顕著に共鳴することが確認できる。

## 5.2 登録番号【2296】 通称 M：- 通称 G：- 総称：Slit drum

■調査結果（調査中）：スリットドラムは、その大きさにより名称が呼び分けられる特性をもつ。本学所蔵資料のスリットドラムは、先行研究における規模別の区分と照合すると、中型の「Ekwe」である可能性が高いと考えられる。しかし、同じイボ族の間でも楽器の呼称には地域差があるとされている。例えば、とある地域では中型のスリットドラムを「Ekwe」ではなく「Ikoro」と呼ぶ場合もある。そのため、各地域による呼称については、今後、さらに精密な調査が必要であること判断し、「調査中」とした。

- ・地域名称：Ekwe または Ikoro
- ・国名・地名：ナイジェリア
- ・民族：イボ族 (Igbo)



### 【判断の根拠】

I. ナイジェリアのイボ文化における伝統的楽器であるスリット木製ドラム (slit wooden drum) を対象とし、その構造的特徴および社会的・文化的意義を検討した論文 (Stella 2022)。同論文では、スリットドラムが大きさの違いによって異なる名称で呼び分けられており、具体的には、最大級または大型のスリットドラムは、イボ語で「Ikolo, Ikoro」と呼ばれ、中型のものは「Ekwe」、小型のものは「Okpokolo」と称される。

II. 芸術品を多く取り扱うアメリカのオンライン・オークション会社 David Rago の公式ウェブサイトを検索 (2025年10月16日アクセス)。『IGBO, SLIT GONG (IKORO), NIGERIA』と表記されており、同ウェブサイトに掲載されている楽器は、本学所蔵資料と外観上および形態的に類似している。掲載情報によれば、この Ikoro は20世紀初頭の制作とされ、ナイジェリア南東部に居住するイボ族において用いられてきた伝統的なスリット・ゴング型打楽器であると説明されている。ウェブサイトに掲載されている楽器は木彫によるもので、取っ手の部分には男性頭部の彫刻が施されており、寸法は

41 × 12 × 12 インチ (約 104 × 30 × 30 cm)、来歴はアラン・ストーン・コレクション Allan Stone Collection (ニューヨーク) に由来するとされている。

### 【楽器の概要】

ナイジェリア南東部のイボ族に伝わる伝統的な打楽器であり、文化的アイデンティティと祝祭の象徴として用いられてきた。砂時計型の長方形の木材に2つの中空のスリットを施した構造を持っており、これにより独特の音色を生み出す。くり抜かれた木材から作られた本体は、スリットの厚みによって高音と低音を出し分けることができる。また、楽器の素材には、現地でオバラ obala と呼ばれている耐久性に優れた熱帯アフリカ原産の木材が用いられていることが多い。

【2296】は、全長が89センチで、直径約30センチのスリットドラムである。取っ手部分には、男性頭部と手と思われる彫刻が施されており、手で耳を塞ぐような仕草を表しているように見受けられる。このような、手で耳を塞ぐような仕草を表した彫刻が施されたスリットドラムは、【2296】以外でもインターネットによる画像検索において複数確認された。

## 5.3 登録番号【906】 通称 M：- 通称 G：- 総称：Harp

■調査結果（おそらく）：専門機関のデータベースおよび図録との照合により、本学所蔵資料と外観上の中度の類似性が確認された。しかし、本学所蔵資料の装飾部分には、データベースおよび図録では確認できなかった特徴が認められる。そのため、複数の学術論文やデータベースを精査し、十分な裏付けを得る必要があると判断した。以上の理由から、現時点では「おそらく」という判断に留めた。

- ・地域名称：Ngombi, Ngombo
- ・国名・地名：ガボン
- ・民族：ツォゴ族 (Tsogo)



### 【判断の根拠】

I. 『人間と音楽の歴史 中央アフリカ』の88～89頁。「ツォゴ族の8弦ハーブ、ゴンビ (ngonbi)」<sup>10</sup>と表記されており、本学所蔵資料と外観上および形態的に類似している。

II. ニューヨークのメトロポリタン美術館のデータベースである Met Collection Online を検索 (2025年7月10日アクセス)。同じ形状をしている楽器が二点あり、どちらも「Ngombi」と表記されている。二点ともガボンのツォゴ族のものであり、弦の数は8弦で本学所蔵資料と外観上および形態的に類似している。

<sup>10</sup> 表記について、引用箇所では「ゴンビ (ngonbi)」、本文中の別の箇所では「ゴンビ (ngombi)」と記されており、表記の不統一が確認される。

#### 【楽器の概要】

Ngombi または Ngombo とも呼ばれるこのアーチ型ハーブは、ガボンに居住するツォゴ族の楽器である。弦にはヤシの繊維が用いられ、革張りの胴体背面に打ち込まれた小型の鉋によって張られている。演奏時にはハーブを直立させ、人の頭部を模った延長部が奏者の顔の近くに位置するように構えられる。また、Ngombi は、ブウェテ (Bwete) と呼ばれる男性のみで構成される秘密結社の儀礼において用いられる。儀礼の場では、8 弦ハーブの演奏と歌唱に加え、片面皮張り太鼓ンドゥング (Ndung) が伴奏として用いられる。歌詞は常套句的な隠喩によって構成され、内部的・秘儀的な意味を含むとされている。

【906】は 8 弦ハーブであり、延長部には長髪の女性の上半身を思わせる装飾が施されている。また、その上半身には羽状の装飾が付され、女性像の額には赤色の印が認められるほか、胸部が誇張されて表現されている点が特徴的である。

#### 5.4 登録番号【956】 通称 M : Zukra 通称 G : Zukra

■調査結果 (おそらく) : 専門機関のデータベースや図録との照合により、本学所蔵資料と外観上の高い類似性が確認され、北アフリカ広域における名称については特定に至った。しかし、特定の民族による固有の名称を断定できず、現段階では広域的な特定に留まるため、判断を「おそらく」とし、継続調査の対象とした。

- ・地域名称 : Mezwid, Mezoud
- ・国名・地名 : チュニジア
- ・民族 : 未詳 (北アフリカ全域)



#### 【判断の根拠】

I. 『人間と音楽の歴史 北アフリカ』の 98～99 頁。図版の説明として「メズード mezoud 奏者。ベジャ 北方、アビオド山地、チュニジア」と表記されており、本学所蔵資料と外観上および形態的に類似している。

II. ニューヨークのメトロポリタン美術館のデータベースである Met Collection Online を検索 (2025 年 11 月 27 日アクセス)。「mezoud (Tunisia)」と表記されており、外観上および形態的に類似している。

#### 【楽器の概要】

チュニジアとアルジェリアの一部で風袋をそなえていることからメズウィッド Mezwid (古典アラビア語で、貯蔵庫、糧秣を入れる革袋の意) または、メズード Mezoud と呼ばれている。この風袋は、小さなガゼル、またはヤギの革で作られ、油に浸してやわらかくしたものである。2 連の管にそれぞれ指

孔があり、基本的にはリビアのズクラと同じ楽器とされているが、リビアのズクラは 4 つの指孔であるのに対して、チュニジアの楽器は 5 つの指孔がある。また、チュニジアでもズクラ Zukra と称されることがある。

【956】は、2 連の管にそれぞれ 5 つの指孔が確認された。さらに、管の指孔間および側面に黒色の斑点模様が施されている点が特徴的である。

#### 5.5 登録番号【781】 通称 M : - 通称 G : - 総称 : Conical drum

■調査結果 (ほぼ確定) : 外部データベースの画像資料により、本学所蔵資料の特徴が Engoma と一致することを確認した。目録情報との整合性も極めて高いことから地域名称を「ほぼ確定」とした。

- ・地域名称 : Engoma
- ・国名・地名 : ウガンダ
- ・民族 : バントゥー系民族 (Bantu)



#### 【判断の根拠】

I. 中央アフリカ王立博物館 (RMCA)、ブリュッセル自由大学、ゲント大学の共同プロジェクトであり、RMCA の民族音楽学的サウンドアーカイブ全体をデジタル化した HP である DEKKMMA project を検索 (2025 年 9 月 17 日アクセス)。「Engoma は、ウガンダ南西部アンコーレ地方 (Ankole) に居住するバントゥー系民族に広く用いられる片面太鼓である。」との記載があり、外観上および形態的に類似している。

II. ニューグロブの寄稿者である Aurelia Hartenberger の研究と収集活動をまとめた HP である The Hartenberger World Music Collection of Historical Instruments を検索 (2025 年 9 月 17 日アクセス)。「Uganda 'Engoma」と表記されており、外観上および形態的に類似している。

#### 【楽器の概要】

バントゥー系民族がよく用いる一枚皮の太鼓。一般的に胴の形状は、上部が円筒形、下部が円錐形の円筒円錐形である。太鼓の皮と締め紐は老いた動物の皮から作られ、紐は全長 60m 以上になることもあり、300 回以上縦に編み込まれる。太鼓には通常、皮ひもで作られた 2 本の横ループがあり、胴の空洞には「太鼓の魂」と呼ばれる小さなガラガラ音を出す部品 (結び目の皮や小石など) が入れられる。これが振動することが重要であり、より音を豊かにするとされている。

【781】について、胴の空洞部分に鳴物が封入されているかを確認するため、実際に楽器を振動させて調査した。その結果、胴内部に硬質な小片が複数存在すると推測されるガラガラ音が確認された。

## 5.6 登録番号【1432】 通称 M：- 通称 G：- 総称：Frame drum

■調査結果（調査中）：専門機関のデータベースとの照合により、本学所蔵資料と外観上の高い類似性が確認された。目録情報との整合性も極めて高いが、地域名称については、さらなる根拠資料の収集が必要であると判断し、現時点では「調査中」とした。

- ・地域名称：Omele oko
- ・国名・地名：トーゴ
- ・民族：ヨルバ族（Yoruba）



### 【判断の根拠】

I. ニューグローブの寄稿者である Aurelia Hartenberger の研究と収集活動をまとめた HP である The Hartenberger World Music Collection of Historical Instruments を検索（2025年10月16日アクセス）。「Yoruba Sakara Drum ('Omele')」と表記されており、外観上および形態的に類似している。また、ヨルバ族の間では「Omele oko」と呼ばれているとの記述がある。

### 【楽器の概要】

ナイジェリア南西部に居住するヨルバ族にとって重要な文化の一部を成す楽器であり、結婚式、伝統的な即位式、祭礼などの儀式において用いられる。また、本楽器は「Sakara」として広く知られているが、ヨルバ族の間では「Omele oko」と呼ばれている。円形の本体は、焼成された粘土によって成形され、打面にはヤギの皮が用いられている。胴の周囲には木製のくさびが等間隔に配置されており、これによって音程の調整が可能である。演奏時には、一方の手でまっすぐな木製のバチを用いて打面を打ち、他方の手でドラムを垂直に脚の上に支えながら、指で打面をミュートすることで音色に変化を加える。

【1432】は直径約20センチであり、胴体内部に埋設されるかたちで紐が通されていることが確認された。

## 6. 課題点および今後の展望

本調査では、アフリカの地域の所蔵楽器を全て調査することは出来なかったが、現在調査中の楽器も含め、殆どの楽器の地域名称はデータベース上で未記入となっていることが確認された。また、調査の過程において、当館の保有する楽器についての新たな情報、例えば使用素材に関する知見が得られたことから、既存記録について改めて精査を行うことが求められる。

なお、報告者はこれまでに114点について調査を行ったが、本報告で事例として取り上げていない楽器については、いまだ実物観察を実施していない点が課題として残されている。実物を直接観察することで、データベース上では把握できない特徴を確認することが可能となり、名称調査の妥当性が高ま

るものと考えられる。そのため、引き続き実際の所蔵楽器を直接観察した上で、情報の照合を行うことが重要な課題である。

また、今後の展望としては、情報の煩雑化を防ぐため、これまでに実施してきた名称調査のデータを体系的に整理することも考えている。現在、アフリカの楽器について名称の調査状況が一見して分かるようにエクセルファイル上に情報を書き出す作業も構想段階ではあるが進めている。今後は、これらの整理資料をアフリカの楽器に関する地域名称を迅速に検索、参照できる情報管理の基盤として活用できるよう改善を図っていきたい。

### 参考文献

（和文献）

岩崎愛 2022 「所蔵楽器の情報に関する調査報告1」『楽器コレクション管理資料集 2022年度版』東京：国立音楽大学楽器学資料館 第6集：9-17.

宇井紗也香 2022 「標本資料のデータファイルメタデータのデジタル化に向けて」『楽器コレクション管理資料集 2022年度版』東京：国立音楽大学楽器学資料館 第6集：49-59.

ガンゼマンズ、ヨス・バーバラ、シュミレットレンガー 1993 『人間と音楽の歴史 中央アフリカ（第9巻）』東京：音楽之友社  
コラル、ポール・エルスナー、ユルゲン 1986 『人間と音楽の歴史 北アフリカ（第8巻）』東京：音楽之友社

（欧文献）

Berliner, Paul F. 1993. *The Soul of Mbira: Music and Traditions of the Shona People of Zimbabwe*. Chicago: University of Chicago Press.

Kunitachi College of Music, Gakkigaku Shiryōkan, ed. 1996. *The Collection of Musical Instruments*. Rev. and enl. ed. Edited by Sumi Gunji et al. Tokyo: Kunitachi College of Music, Gakkigaku Shiryōkan.

Nwobu, Stella N. 2022. "Indigenous Music Technology: The Construction of Slit Wooden Drum in Igbo Culture, Nigeria." *International Journal of Innovative Research & Development* 11, no. 8: 17-26.

Tracey, Hugh. 1961. "A Case for the Name Mbira." *African Music* 2, no. 4: 17-25.

（ウェブサイト）

DEKMMMA project. n.d. "Engoma." *Digitization of the Ethnomusicological Sound Archive of the Royal Museum for Central Africa*. Accessed September 17, 2025. <https://music.africamuseum.be/instruments/english/uganda/engoma.html>

Hartenberger, Aurelia. n.d. "Uganda 'Engoma'." *The Hartenberger World Music Collection of Historical Instruments*. Accessed September 17, 2025. <https://wmic.net/uganda-engoma/>

Hartenberger, Aurelia. n.d. "Yoruba Sakara Drum ('Omele')." *The Hartenberger World Music Collection of Historical Instruments*. Accessed October 16, 2025. <https://wmic.net/yoruba-sakara-drum-omele/>

Kubik, Gerhard, and Peter Cooke. n.d. "Lamellaphone." *Grove Music Online*. Oxford Music Online. Accessed May 15, 2025. <https://www.oxfordmusiconline.com/grovemusic/display/10.1093/gmo/9781561592630.001.0001/omo-9781561592630-e-0000040069>

The Metropolitan Museum of Art. n.d. "Ngombo." *Met Collection Online*. Accessed July 10, 2025. <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/503193>

The Metropolitan Museum of Art. n.d. "Zukra." *Met Collection Online*. Accessed November 27, 2025. <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/500969>

UNESCO. 2023. "Mbira/Sansi inscribed on the Representative List of the Intangible Cultural Heritage of Humanity." *UNESCO Intangible Cultural Heritage Lists*. Published April 20, 2023. Accessed May 15, 2025. <https://www.unesco.org/en/articles/mbira/sansi-inscribed-representative-list-intangible-cultural-heritage-humanity>

## 第 2 部

# 保存環境に関する記録

2025 年度は、有翅チャタテムシとヒメマルカツオブシムシの幼虫の発生が見られた。ここでは、それぞれの発見と経過、行った対策について記録する。

### 1. 当館における文化財害虫の防除

文化財害虫の侵入や発生状況を把握・管理するため、当館では、粘着トラップによる昆虫調査を年に 2 回実施してきた。調査時期は、虫の活動が活発になる春と、外気温の低下に伴い室内へ侵入する昆虫が増える秋としている。

トラップは、展示室および収蔵庫に加え、ラウンジエリア、廊下、給湯室など、全体で 30 箇所に 4 週間設置し、春季調査では、文化財虫菌害研究所へ送り、昆虫の同定と防除対策に関する助言を受けている。

これまでのトラップ調査で捕獲された昆虫は、チャタテムシ類のほか、野外性ゴキブリ類、コバエ類、クモ類、アリ類、タカラダニ類など、屋外から侵入したものが主であった。文化財害虫に分類されるのはチャタテムシ類であり、湿度が滞留していると考えられる部屋の隅や鍵盤楽器背面に設置したトラップから、ヒラタチャタテ類が多く見られた。

こうしたトラップ調査結果を踏まえ、虫の侵入および発生への対策として、扉に設置している虫侵入防止のドアブラシの交換、湿度管理の徹底、清掃などを行ってきた。

### 2. 2025 年度に発生した有翅チャタテムシの大量発生

2025 年 5 月、当館において、これまでに例のない規模で有翅チャタテムシの大量発生を確認した。これまで当館で確認してきたチャタテムシは、薄褐色で、体長 1.0 ～ 1.3mm 程度の小型個体であったが、今回発生した個体は翅を有し、体色が濃く、体長 4.0 ～ 5.0mm 程度の大型種であった。

### 3. チャタテムシ類の生態と影響

#### 生態

高湿度環境を好み、主にカビを餌とする。単為生殖を行う種も存在し、環境条件が整うと短期間で個体数が増加する傾向がある。風通しが悪く湿度の高い場所に生息しやすい。

## 文化財への影響

カビや塵を摂食するため、資料への被害は軽微だが、他の虫をおびき寄せる要因となる。

## 人への健康影響

死骸や糞を介して、アレルギー症状等を引き起こすことがある。

## 4. 発見から対策までの経過

### 5月9日（金）

5月2日（金）より2025年度春季トラップ調査を開始しており、1週目の状況確認を行ったところ、これまでの調査では確認されていない種類の昆虫を捕獲していた。後に有翅チャタテムシであることが分かったが、この時点では種の特定に至らなかったため、不明羽虫として記録した。

当該個体は、ラウンジェリアなど外部に面する箇所や廊下だけでなく、展示室内のトラップからも数匹確認された。

### 5月12日（月）

朝、バックヤード廊下の壁沿いに多数の昆虫の死骸を確認した。廊下の数箇所で20～30匹の死骸がまとまって見られ、いずれも物陰や機械室扉付近であった。廊下全体では100匹以上を確認した。

生存個体も数匹確認されたが、死骸が多かった理由は、バックヤード廊下の壁沿いキックガードにピレスロイド系薬剤を散布していた影響と考えられる。

また生存個体の形態から、有翅チャタテムシである可能性が高いと判断した。本学管財課へ状況を共有し、記録撮影後、清掃を実施した。



物陰の死骸箇所

死骸の集まった場所

生存していた個体

### 5月13日（火）

前日に清掃した箇所に新たに10～20匹の死骸を確認した。いずれも空調関連機器が設置されている機械室のドア付近であったため、室内を確認したところ、多くの生存している有翅チャタテムシを確認した。バックヤード廊下には3室の機械室があり、各室で数十匹程度を確認した。

チャタテムシ類は高湿度環境を好むため、廊下に家庭用除湿器を設置し、データロガーによる温湿度

の常時記録を開始した。

### 5月16日（金）

管財課の手配によって、文化財燻蒸・害虫防除を専門とする東化研株式会社の調査が実施された。調査の結果、機械室内で発生し、繁殖サイクルしている可能性を指摘された。

### 5月22日（木）

追加で粘着トラップを23箇所に設置し、各機械室および廊下の5箇所にライトトラップを設置した。有翅チャタテムシは光に集まる習性があるため、ライトトラップは有効であるとのこと。



機械室に設置したライトトラップ。黄色い部分が粘着面となっている。

### 6月10日（火）

例年実施している文化財虫菌害研究所による4週間のトラップ調査が終了した。研究所へ状況を共有したところ、機械室内およびその周辺に追加で10箇所のトラップ設置が推奨されたため、1週間だけ追加で調査を実施したのち、トラップを研究所へ送付した。

## 5. トラップ調査結果

文化財虫菌害研究所に判定を依頼した粘着トラップ40点と、東化研に依頼して設置した粘着トラップ23点およびライトトラップによる捕虫数を、以下にまとめる。ここでは、有翅チャタテムシ類およびヒラタチャタテムシ類のみを対象とした。なお、同一エリア内に複数のトラップを設置している場合は、捕獲数を合算して示している。

文化財虫菌害研究所の判定を得た粘着トラップ①  
実施期間：5月2日（金）～30日（金）

文化財虫菌害研究所の判定を得た粘着トラップ②  
実施期間：6月10日（火）～17日（火）

	翅有	翅無
ラウンジ	29	0
ロビー	15	2
展示室	46	36
楽器庫	14	4
給湯室	14	0

	翅有	翅無
機械室1	27	23
機械室2	10	37
機械室4	3	5
廊下	19	21

東化研の判定を得た粘着トラップ

実施期間：5月22日（木）～6月12日（木）

	翅有	翅無
機械室 1	51	44
機械室 2	3	21
機械室 4	52	35
廊下（4か所のまとめ）	85	61
ロビー（2か所のまとめ）	13	5
給湯室	2	6
楽器庫（5か所の合計）	21	6
展示室（4か所の合計）	5	8

東化研の判定を得たライトトラップ

実施期間：5月22日（木）～6月12日（木）

	翅有	翅無
機械室 1	374	1
機械室 2	498	0
機械室 4	65	0

文化財虫菌害研究所に判定を依頼した粘着トラップの捕虫結果から、例年は確認しない有翅チャタテムシが、ラウンジエリアと展示室で多く捕獲されたことがわかる。

ラウンジエリアは、正面玄関付近に設置したトラップで16匹と最も多く捕獲された。展示室は展示ケース内に設置したトラップからは確認されず、入口ドア付近に設置したトラップで9匹、さらに廊下につながる非常口付近に設置したトラップで24匹が確認された。

有翅チャタテムシは樹木など屋外環境で発生することがあるとされていることから、ラウンジエリアで捕獲された虫は、屋外から直接侵入した可能性が考えられる。

また展示室においては、ラウンジを経由して侵入した個体に加え、機械室で繁殖した個体が廊下側から侵入したことが推測され、複数の侵入経路が存在していたと考えられる。

また、追加で機械室に設置したトラップにはいずれも多くの有翅チャタテムシが確認できたが、翅のないチャタテムシ類も見られた。機械室内が高湿度の環境であったと考えられる。

有翅チャタテムシは光に集まる習性があるため、ライトトラップでの捕獲数は顕著であった。

## 6. その後の経過と対策

トラップ調査終了後も目視観察を継続していたが、死骸および生体が確認される頻度は次第に減少した。特に9月以降は個体数が急激に減少し、その後は確認されなくなった。

対応策として殺虫剤の噴霧も検討したが、今回は実施していない。トラップ設置によって個体数が減少したことに加え、季節の進行に伴う湿度低下の影響により、発生が収束したものと考えられる。

文化財虫菌害研究所および東化研の各調査機関から得られたコメントの要点をまとめると、**有翅チャ**

**タテムシが大量に捕獲されたが、建物外の樹木等で発生し、室内に侵入した可能性が高いこと、また、機械室には排水が見られることから、機械室またはその近辺で発生した個体が周囲へ拡散したものと推定される、**というものであった。

今後の対策

- ・トラップ調査を毎月実施し、文化財害虫の発生および侵入を早期に把握できる体制を整える。
- ・機械室の排水箇所に、昆虫侵入防止のためチャタテムシ類のサイズより目の細かいネットを被せる。
- ・ドアブラシの交換を適切に行う
- ・清掃活動の継続に加え、機械室も随時目視点検を行う。
- ・廊下も湿度60% RH以下にコントロールできるよう除湿器を活用する。

なお、時期は特定できないものの、非常口サインの隙間に有翅チャタテムシと考えられる多数の死骸が入り込んでいることが確認された。大学内の他の建物に設置された非常口サインでも同様の現象が見られたことから、本学キャンパス内には有翅チャタテムシが一定数生息しているのだろう。



非常口サインの表示の隙間に挟まる多数の有翅チャタテムシ

## 7. 2025年度に発生した楽器収蔵庫内のヒメマルカツオブシムシ

有翅チャタテムシが減少し、安堵していた6月後半、収蔵庫内でヒメマルカツオブシムシの幼虫が頻りにみられるようになった。6月から10月の間のカツオブシムシの発生について報告する。

## 8. ヒメマルカツオブシムシの生態と影響

生態

屋外に広く生息する甲虫で、成虫は花粉や蜜などを摂取する。産卵場所を求めて建物内に侵入することがある。文化財への被害を引き起こすのは幼虫であり、動物性素材を主な餌とする。繊維製品の内部などに潜み込みやすい。

文化財への影響

幼虫は皮革、羊毛、絹などの動物性素材を摂食するため、楽器部材（ピアノのハンマーヘッドにつけられた革やフェルト、太鼓の革、弓毛等）および装飾部、楽器ケースなど広く被害を及ぼすおそれがある。幼虫期間は比較的長く、夏から秋にかけて成長し、冬期は幼虫の状態活動を低下させ、翌春以降に蛹化・羽化する。

## 9. 発見と対策

6月24日（火）

毎週火曜日に実施している収蔵庫清掃の際、ヒメマルカツオブシムシの幼虫1匹を発見した。発見された幼虫は体毛の発達が不十分であり、孵化後あまり時間が経過していない可能性が考えられた。



6月24日に発見したヒメマルカツオブシムシの幼虫。体長4mmほど。

発見エリア周辺を観察したところ、付近に排気用ダクトがあることから、当該箇所からの侵入の可能性を考慮し、ダクト開口部にシャワーキャップを被せ、隙間が生じないように応急的に塞ぐ対応を行った。

7月1日（火）

収蔵庫内に粘着トラップを設置したが、結果的にトラップで捕虫されたのはチャタテムシ類のみだった。

7月8日（火）

清掃時にヒメマルカツオブシムシの幼虫を1匹捕獲、抜け殻を2つ発見した。

9月2日（火）～9月22日（火）

9月2日、9日、16日、22日の各清掃時に、ヒメマルカツオブシムシの幼虫をそれぞれ1～2匹ずつ確認した。9月9日には幼虫2匹に加え、粘着トラップに1匹が捕獲され、抜け殻1点も確認された。また9月16日には、ヒメマルカツオブシムシの幼虫によって捕食されたと考えられる、分解された昆虫の死骸が確認された。

9月に確認された幼虫の生体数は合計9匹であった。一般に、同一場所で5匹以上の幼虫が確認された場合、その周辺で繁殖が行われている可能性が示唆されることから、捕獲位置を記録し発生源の特定を試みた。しかし、発生源を特定するには至らなかった。

## 10. 発生源と考えられる物体の発見と対策

ヒメマルカツオブシムシの幼虫は、タワシのように全体に長い毛が生えているためか、もぞもぞとした動きながらも比較的速く移動する。そのため、発見された場所が必ずしも発生源に近いとは限らず、発生場所の特定が困難であった。

多くの楽器は蓋付きのアーカイバルボックスで保管している。このボックス内部で発生し、箱外へ脱出してきた可能性はあるだろうか。幼虫はボックスの側面を垂直に登ることができるのだろうか、蓋に幼虫が通れる隙間はないように見えるが、穴を開けて出てくることもあるのだろうか。幼虫の能力に不明な点も多かったが、まずはアーカイバルボックスではなく、個別のハードケースに入れて床に立て、

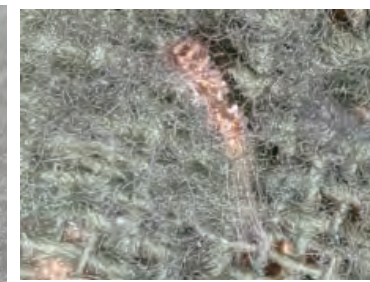
壁にベルトで固定して保管している楽器から点検を行うこととした。

その結果、チェロを保管していた古い木製ケースと周囲から、以下の昆虫遺骸等が確認された。チェロ自体は金属製（通常チェロは木製であるが、本資料は胴部が金属製である）だったこともあり、楽器自体への被害は見られなかった。

- ヒメマルカツオブシムシの死骸 4点
- ヒメマルカツオブシムシの抜け殻 3点
- ヒメカツオブシムシの死骸 1点
- アリガタバチの死骸 1点



ヒメマルカツオブシムシの抜け殻



ヒメカツオブシムシの死骸



アリガタバチと思われる虫の死骸



19世紀に製作された金属製のチェロ。ケースは木製で古い。

当該木製ケース内からは、ヒメマルカツオブシムシの死骸および抜け殻に加え、ヒメカツオブシムシの死骸、加えて周辺から摂食された痕跡のある甲虫の死骸とアリガタバチと思われる虫の死骸とも確認された。

ヒメマルカツオブシムシの幼虫は、昆虫死骸の内臓を摂食することが知られている。このことから、甲虫の死骸に見られた内臓摂食痕は、ヒメマルカツオブシムシ幼虫による可能性が高いと考えられる。

また、キアシアリガタバチはヒメマルカツオブシムシの幼虫に寄生することがあるとされている。今回、当該ケース内から見つかった小さな蜂のような姿の個体もこの種なのではないかと考える。

またその後、別の場所に保管しているギター用の古いケースからもカツオブシムシの抜け殻が発見された。

以上のことから、古い木製ケースがカツオブシムシ類の繁殖に関与した場所であることは間違いなく、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）による殺虫処置を実施した。ケースを隔離して以降、楽器収蔵庫内においてカツオブシムシ類は確認されていない。ただし、この木製ケースで発見した死骸や抜け殻が、いつの時期のものかは不明であり、9月に頻繁に目撃された生体と同一世代であるかも判別できない。そのため、今後も定期的な資料およびケースの詳細な点検を必要とすると感じられた。

## 11. 今後の対策とヒメマルカツオブシムシの生態の観察

### 今後の対策

- ・粘着トラップによる調査を定期的実施し、幼虫・成虫の発生を早期に把握できる体制を維持する。
- ・春期の収蔵庫の扉の開閉については、これまで以上に注意を払う。
- ・収蔵楽器の定期的な点検の際、楽器資料だけでなく、ケース（特に緩衝のために張られた布の繊維の隙間など）に対し、目を凝らして確認する。発生が疑われる場合には速やかに隔離する。
- ・古いケースは楽器と分け、脱酸素剤をいれた密封袋で保管することも検討したい。

今後の対策検討に資するため、ヒメマルカツオブシムシの幼虫1匹について、長期間の観察を行うこととした。観察の目的は、蛹化に至るまでの期間、成長に伴う体長変化の推移、ならびにアーカイバルボックス内部から、垂直移動または穿孔によって外部へ移動する可能性の有無を確認することである。

当該幼虫はプラスチック製ケースに収容し、餌は、昆虫死骸が適しているとされているが、代替として煮干しを用いている。



観察している  
ヒメマルカツオブシムシの幼虫

蛹化は翌年5月頃と見込んでおり、蛹化が確認された段階で、蓋付きのケースへ移し替える予定である。羽化後は、当館から一定の距離を置いた屋外の白花をつける植物のある場所へ放す計画としている。

## 12. まとめ

本年度は、春から秋にかけてチャタテムシ類およびヒメマルカツオブシムシの発生が相次ぎ、虫菌害防除の重要性を改めて認識する一年となった。

チャタテムシ類の発生対応では、湿度管理、清掃、物理的侵入防止対策、トラップ調査といった基本的な環境管理の重要性を再確認し、ヒメマルカツオブシムシの発生については、所蔵資料および収納資料の定期的な点検が極めて重要であることを実感した。

今回の対応を通じて培われたIPMの実践を、今後も継続していく所存である。

なお、過去数年の記録を振り返ると、ある年に大量発生した虫が翌年にはほとんど確認されなくなったり、年ごとに目立つ虫の種類が異なったりする傾向が見られる。本年度はチャタテムシ類とヒメマルカツオブシムシであったが、昨年はチョウバエ、一昨年はノミバエとクモの発生が目立っていた。なぜだろうか。気候による影響なのか、たまたま侵入してきた虫種の違いなのか、館内の環境によるのか。

分からないことも多いが、当館では館内で虫を発見した際、館内平面図に虫の種類と日時を記入し、虫の侵入を視覚的に把握する取り組みを行っている。こうした記録を年単位で蓄積していくことは、将来的な発生傾向の把握や予防的対策の検討に資するものと考えている。

## 13. チャタテムシの観察について（後日追記）

2026年2月現在もヒメマルカツオブシムシ幼虫の観察を継続している。大きさはあまり変化が見られない。

一方、幼虫がアーカイバルボックス素材の垂直面を登ることができるかどうか試したところ、可能だということが分かった。内寸35mm四方、高さ19mmの箱を同素材で作製し、幼虫を入れたところ、幼虫は角に移動した後、壁をつたって高さ19mmの壁面を登り切った。その間、30秒もかからなかった。このことから、箱の蓋を開けたままにした場合や、隙間がある場合には、内部への侵入および内部からの脱出が可能であると考えられる。

しかし、プラスチックや金属製は（形状によるかもしれないが）、滑って登ることは難しいようだ。



幼虫の垂直面の移動可否を確認するために作製した試験箱



垂直面を登る幼虫



垂直面上端に到達した幼虫

2025年度は、空調機のトラブルにより温湿度コントロールが困難となる時期が生じた。ここではその発生状況と対応について記録する。あわせて、今年度初めて行った「カビ類調査・浮遊塵埃調査」についても報告する。

### 1. 当館における温湿度管理の基本方針とこれまでの経緯

展示室、収蔵庫、工房は24時間空調で管理しており、夏期は22℃・相対湿度50%、冬期は20℃・相対湿度50%を基準の設定としている（目指している湿度は55%ほどだが、設定を55%にすると、60%前後で推移するため）。しかし、これまでも『楽器コレクション管理資料集 8 活動報告編 2024年』「保存環境に関する記録 2024年度の温湿度の傾向と対策」に記載したとおり、室外機の機能低下により湿度が上昇する事例が複数回発生してきた。

### 2. 2025年度に発生した展示室空調トラブルの要因

2025年度は、展示室および工房において空調トラブルが発生した。原因は熱交換器における冷媒ガス漏れであったが、当初は室外機ファンの汚れによる機能低下と推測し、原因の特定および対応に時間を要する結果となった。

### 3. 原因特定までの経過

展示室の空調設定を22℃・50%にしているにもかかわらず、9月上旬から湿度が上昇し、相対湿度60～66%で推移する状況が見られた。これまでの経験から、室外機の機能低下が原因である可能性が高いと判断し、本学管財課に依頼して空調室外機フィンの洗浄を実施することとした。

しかし、洗浄実施直前から展示室の温度も徐々に上昇する現象が確認され、設定温度より1～2℃高い23～24℃で推移するようになった。温度上昇に伴い、相対湿度は58～59%まで一時的に低下した。

その後10月17日に空調ファンの洗浄が実施されたが、その後も室温が下がらず24℃台で推移した。設定を21℃に下げても変化はなかった。

10月下旬になると外気温低下の影響とみられ、室温は23℃台まで低下したが、例年よりも高い温度の

ため室外機の汚れ以外の要因を考え、改めて管財課に調査を依頼した。その結果、冷媒ガス漏れが原因である可能性が高いとの判断に至った。

### 4. 冷媒ガス漏れ調査

11月10日より、冷媒ガス漏れをしている箇所の特定向けた調査が開始された。

ダイキン担当者の説明によれば、調査初日は配管内に残存している冷媒ガスを回収し、漏出量を確認する工程を行うとのことであった。

その後、再度ガスを補填し、空調を一時的に復旧させたいうえで、翌日以降に漏れ箇所の特定向入する予定とのこと。調査には1週間程度を要する可能性があり、過去に大学内の別の建物で発生した事例では屋外配管で漏れがあったことから、今回も屋外配管から順次調査を行うとの説明があった。

### 5. 調査結果と応急措置

冷媒ガスの残存量を量った結果、通常、約18kgの冷媒ガスが充填されているところ、10kg以下まで減少していることが判明した。冷媒ガスが不足すると、空気を冷却することができなくなり、結露させて水分を除去する工程も機能しない。結果として室温が下がらず、除湿能力も低下するという説明があった。

ガス漏れを起こしている箇所については、翌日以降に調査を行う予定であったが、ダイキン担当者が当館職員に状況説明をするため結露排出ダクトを示し、手で触れたところ、水ではなくオイルの付着が認められた。本来、該当箇所からは結露水が排出されはずであることから、オイルが確認されたことは、その場所で冷媒ガス漏れが生じていることを示す状況であり、漏れ箇所が冷却装置（熱交換器）であることが判明した。漏れ箇所が調査初日に見つかったことは幸運であった。

冷却装置の交換には部品の取り寄せに日数を要するため、応急対応として冷媒ガスの充填が行われた。ガス漏れ箇所を交換しなくても、ガスを充填することでしばらくの間は機能が回復するという。その言葉通り効果は即座に現れ、温度は設定どおり21℃まで低下した。ただし湿度は55%前後で推移した。湿度55%である状況は、楽器資料にとって悪い影響がでるものではないが、12月上旬に当館所蔵楽器を使用したコンサートを予定しており、会場湿度が40%台であることを想定し、楽器を慣らす目的で展示室の湿度をやや低めにしておきたいと考えていた。そこで相対湿度を下げることを目的に、設定を22.5℃・50%としたところ、湿度は47%まで低下した。

### 6. 工房系統への影響と対応

一方、工房（修復等を行う部屋）においても、温度が25～26℃で推移する状況が続いていた。しか

し工房に楽器を保管していない期間だったため、問題点を管財課と共有しつつも、展示室を優先して対応を進めることとした。

## 7. 冷却装置（熱交換器）の交換作業

12月9日、冷却装置（熱交換器）の交換工事が実施された。調査から交換工事までに1か月を要した理由は、冷却装置の手配に時間がかかったからということであった。工事自体は半日ほどで終了した。同日、工房系統の冷媒ガスも充填したところ、工房の温度は速やかに設定値に近づき、工房系統についても冷媒ガス漏れが原因であったことが確認された。ただし、ガス漏れの具体的箇所は未特定であり、年明けに改めて調査を行う予定となった。

## 8. 発生要因の整理と今後の対応方針

これまで当館で発生してきた空調不具合は、主に室外機の汚れによる機能低下が原因であったが、2025年度は展示室および工房の2系統で、ほぼ同時期に冷媒ガス漏れが発生した。ダイキン担当者によれば、空調機器はおおむね10年程度で冷媒ガス漏れ等の不具合が生じやすくなる傾向があるとのことである。当館は2017年に耐震を主な目的とした改修工事が行われており、空調機器もその際に更新されている。まだ10年にはまだ満たないが、24時間稼働であることを考慮すると、経年劣化が主因である可能性が高いと考えられる。

以上を踏まえると、今後は収蔵庫系統の空調についても同様の不具合が生じる可能性が否定できない。温湿度コントロールが効かなくなった場合、原因の特定から機器交換に至るまでに数か月を要すると、その間に資料へ影響が及ぶおそれがある。

そのため、収蔵庫で同様の事象が発生した場合には、原因究明と並行して、まず応急的に冷媒ガスの充填を行い、環境の回復を優先する。そのうえで冷媒ガス漏れ箇所の特定と応急対応を進める、という手順で対処する方針を定めた。

## 9. カビ類調査・浮遊塵埃調査と結果

5月に有翅チャタテムシが大量発生したことを受け、館内環境の把握を目的として、6月に空中浮遊真菌および塵埃調査を実施した。調査は館内の18か所を対象に行った。

### 浮遊真菌調査

いずれの場所も真菌検出数は基準となる5以下であり、清潔区域であると判定された。一方で比較対象のために計った屋外は15という高い数値を示した。これは、当館が鉄道線路に近接した立地である

ことなど、周辺環境の影響によるものと考えられる。

そのため、館内の環境を維持するために、屋外につながる扉を開け放さないこと、定期的な清掃の維持、空調機および除湿器による湿度管理を行うことが必要である。

### 表面付着菌調査

いずれの場所も付着真菌数は基準となる10以下となっており、良好な状況であることが確認された。

### 浮遊塵埃調査

展示室、収蔵庫では問題となる数値は確認されなかったが、事務室や倉庫等において高い数値が確認された。その要因として、事務室はコロナ禍以降、網戸を用いてはいたが窓を開放して換気を行っており、外の塵埃が流入している可能性が考えられる。また、展示室や収蔵庫、事務室周辺においては、週1で清掃を行っているが、倉庫においては、月1の清掃を目指しているものの、業務状況により実施を延期することもあり、そうした清掃の頻度の差が要因であると考えられる。

今後の対策として、事務室の窓開放による換気の時間調整や頻度の見直しを行うとともに、倉庫の清掃体制を強化する。あわせて、来年度も同じ時期に調査を行い、定期的な記録を蓄積することで館内環境の管理に活用していきたい。

楽器コレクション 管理資料集  
9  
活動報告編 2025 年度版

## 第 3 部

# 資料管理に関する記録

### 1. はじめに

当館では、楽器に関わる様々な書籍資料（国内外の博物館のカタログや図録、紀要等学術誌、その他一般書籍等）を所蔵している。これらの資料は、長い間さまざまな管理の方法が思案されてきた。現在は、2021年に作成された書籍のデータベースを用いて管理している<sup>1</sup>。本データベースによって、タイトルや著者名から書籍を検索することが可能となった。

書籍のデータベース化が進む一方で、同じ書棚に保管されている、当館と国内外の博物館とのやりとりが残る書簡や、ファイリングされた細かい資料は未整理のままであった。これらの資料はファイルの中に綴じられているため、書棚の中で内容が一目で把握できず、資料として活用しにくい状況であった。書籍データベースの大枠ができあがり、整理がひと段落ついたため、今年度はこれまで着手できていなかった資料の整理を開始した。

### 2. これまでの状況

#### 2.1 資料の種類

当館の書棚には以下の3種類の資料を取めている。

##### ①書籍

国内外の博物館のカタログや図録、学術誌、一般書籍

##### ②博物館ごとのファイル

これまでやり取りした書簡やパンフレットなどを博物館ごとにファイリングしたもの  
(写真1, 2, 3中のオレンジ色のファイル。以下「オレンジファイル」と表記)

##### ③クリアファイルに取められた資料

論文や資料のコピーなど、冊子になっていない資料

上記資料のうち、②③はデータベースに未登録であった。今年度整理したのは主にこれらの資料である。

<sup>1</sup> 現在の管理方法に関しては、『楽器コレクション管理資料集 5 活動報告編 2021年』37～49ページの、宇井紗也香「書籍の管理について」に詳しい。

## 2.2 書籍データベース

2021年度から継続して登録・利用している書籍データベースは、書籍のタイトルや著者、出版社といった基本情報との書籍の保管場所を登録したものである。以前は紙の書籍登録簿において管理していたが、電子データベースを作成し、タイトルや著者名からの検索が可能になった。2021年からの4年間であらかじめの書籍（2.1に示した①）の登録が完了している。

## 2.3 博物館番号

当館では、博物館から発行された書籍や、その博物館に関する資料、受け取った書簡等を博物館番号に紐づけて管理している。当館が使用している博物館番号は以下の2種類がある。

### ①旧博物館番号

*International Directory of Musical Instrument Collections* (Jenkins 1977) の定める番号  
国番号（3桁）＋国別博物館番号（3桁）

### ②A番号

国内の博物館に対して楽器学資料館が割り振った独自の番号  
A＋都道府県番号（2桁）＋都道府県別博物館番号（3桁）

博物館が発行する資料や書簡はすべて旧博物館番号順に書棚に収められている。国外の博物館に関しては、全て旧博物館番号で管理している。かなり昔に規定された番号であるため、西ドイツと東ドイツが別の国として振り分けられていることなど問題点はあるが、博物館ごとに個別の番号を振り分けて資料と紐づけるという機能においては概ね不都合がない。

国内の博物館には旧博物館番号とA番号が混在して割り当てられている。おそらく、はじめは国外の博物館と同じく旧博物館番号を割り当てたが、次第に煩雑になり都道府県別に管理する必要に駆られて新たにA番号を作成したものと考えられる。しかし、国内博物館においても旧博物館番号とA番号が両方付与されている場合といずれか片方しか付けられていない場合があり、この混同によってデータベース上で紐付けが統一できていない問題がある。

## 2.4 問題点

以上の状況から浮上する問題点をまとめる。まず、2.1に述べたとおり、書棚のなかでは3種類の資料が混在して並んでいるため、一瞥して書籍を見つけにくい。加えて、これらの大きさもさまざまであるため、特に小型の書籍やクリアファイルに入った薄い資料は大型の書籍の中で埋もれてしまう。また、2.1に示した②③のファイリングされた資料は、外からは中身が見えないため、内容がわからないことも多い。最後に、2.3に示したとおり、国内の博物館が発行する書籍等に関しては、博物館番号が統一できていないため、紐付けが一部機能していない。

これらのことを解決するために対処したことを次の「3. 作業」にまとめる。

## 3. 作業

オレンジファイル及びクリアファイルの内容を整理するために行なった具体的な作業を以下にまとめる。

### ①オレンジファイル、クリアファイルの内容確認

ファイルに綴じられた資料の内容をデータベースに登録した。そして、ファイルの資料が外から把握できるよう、ファイルのラベルに内容物を記していたが、その情報が十分ではなかったため、不足がある部分は書き足した。また、オレンジファイルはその博物館個別の情報（館のパンフレットや書簡）のみを綴じるものとし、楽器の写真や論文など調査研究一般に役立つと考えられる資料はここから取り出して、探しやすいようクリアファイルに収めることにした。

### ②資料の並び替え

2.1に述べた3種類の資料が混交している書棚内を【オレンジファイル】【クリアファイル】【小型書籍】【その他書籍】の4段階で分けけて図1のように並び替えた。また、並び替える作業の最中で大きな書籍に紛れて埋もれていたために登録できていなかった小型の書籍が見つかることもあり、これらは随時データベースに追加していった。この作業により薄い資料や小型の書籍が埋もれなくなったため、どの資料も目に留まるようになった。

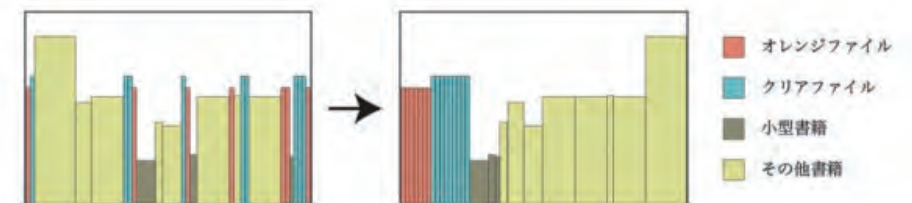


図1 書籍整理略図

### ③インデックス作成

資料が探しやすいよう、国番号ごとにインデックスを挿入した。（写真3）

### ④国内博物館番号の併記

国内の博物館は、先述のとおり旧博物館番号とA番号が混在しており、データベース登録の際にはどちらかの登録が抜け落ちているケースも多かった。したがって、これまで登録作業済みの書籍も含め、付与した博物館番号とデータベースの登録情報を照合し、旧博物館番号・A番号を併記する方向で統一した。しかし、そもそもどちらか片方しか番号が付けられていない博物館もあり、国内博物館の番

号紐付けにはまだ課題が残っている。



写真1 整理前書棚



写真2 整理済み書棚



写真3 インデックス

以上の作業を進めているが、未だ整理の途中であるため、少しずつこれを進めていきたいと考えている。

#### 4. まとめ

本年度は、これまであまり整理できていなかった細々とした資料の整理に着手できた。これらの中には、楽器に関する論文や、かつて当館に勤務していた学芸員が国内外の博物館に赴いて撮影したと思しき写真や、他館から所蔵楽器について情報提供を受けた書簡など、研究に寄与する資料であるにもかかわらず、これまで目につかない場所に置かれていたため活用されてこなかったものも多くあった。このように資料のデータベース化の作業をひと駒前進させることができたのは、2021年に書籍のデータベースが作成され、あらかじめ書籍の確認ができていたからこそである。2021年度から続いていた、膨大な書籍の全体像の把握と、データベースの作成は、いわば書籍整理作業の1周目であり、今年度始めたのは1周目で不十分だった部分を補いながらより詳細な情報を把握する、2周目の作業である。このように作業を何周も少しずつ進めることで、より精度の高い充実したデータベースが作成できる。従って、何年もかけて長期的に継続するものと見越して、作業者はその内容とその意図を記録に残していくことが重要である。

#### 5. 最後に

オレンジファイルに残された国内外のさまざまな博物館との書簡のやり取りから、楽器学資料館では集中的に海外の博物館とやりとりをして所蔵楽器の情報を収集している時期があることがわかった。また、そのやりとりの時期のばらつきから、地域ごとに情報収集をしていたのではないかと思われる。こうした資料から、これまでの当館の研究活動の行跡やその意図、方針が垣間見えてくる。しかし一方で、受け取った書簡は残っていても、差し出したものはほとんど残っていないため、推測しなければいけない部分も多い。

楽器学資料館は、前身である音楽研究所での活動開始から、来年度50周年を迎える。残念ながら、当館がかつて行った研究の中にはその内容や目的など詳細が不明なものもある。これらは資料が失わ

れてしまったのか、そもそも記録をしていなかったのか、残っていても見つけられていないだけなのか定かではないが、いずれにせよ記録を残し管理することの煩わしさと重大さを感じながら作業を進める日々であった。今年度始めた楽器学資料館のかつての足取りを追うようなこの作業がいつかの50年を振り返る際に役立てばうれしい。

#### 参考文献

Jenkins, Jean, ed. *International Directory of Musical Instrument Collections*. International Council of Museums, 1977.

## 第 4 部 活動報告

### 1. はじめに

本報告では、ビニル盤レコードの活用を目的とし、レーザーターンテーブルによる記録精度について述べる。楽器学資料館では現在約 2500 点のレコード盤を所有し、入手困難なレコード盤も数多く存在する。貴重な音源を次の世代に継承することを目的とし、デジタル音源として保存する可能性を考える必要がある。ビニル盤レコードをデジタル音源として保存するためには、一般にはレコードプレーヤーで再生し、デジタル形式で記録する必要があるものの、アナログレコードプレーヤーには針、カートリッジ等の部品点数が一般に多く、再生音への影響が強い。よってアーカイブ化の観点からは部品の影響を受けづらい記録環境が望ましい。レーザーターンテーブルは物理的な針を用いずに光学的にレコード盤に刻まれた波を読み取るため、一般にレコード盤を傷つけることがない。この技術は最初に 1977 年にはじめて開発され [1]、傷ついたレコード盤の読み取りや非侵襲で読み取る技術として開発されてきた。1989 年にエルプ社が技術を引き継ぎ、国内でレーザーターンテーブルの販売を行なっている。2000 年以降は、レコード盤上の刻みを画像処理によって取得し、音の再現を試みた研究もある [2,3]。アナログレコードには独特の印象があり、ノスタルジアや懐かしさと関係するものの、音質については心理学でいうハロー効果の一部だともいえる [4]。

本報告ではアナログレコード固有の印象について議論の対象から外し、レーザーターンテーブルによる再現精度について注目し、特にインパルス音の発生について調査する。

### 2. レーザーターンテーブルの仕組み

使用するレーザーターンテーブルは、エルプ社製「レーザーターンテーブル LT-master」とした。同製品のスペックについては同社ウェブページを参照されたい [5]。同製品によるレコード盤の再生方法は、トレーの上にレコード盤を配置し、再生ボタンを押すという形式である。従来のレコードプレーヤーとは異なり、針を使わない方式であるため、本体の品質を守ることができる。



図1 レーザーターンテーブルの外観

長所としては、物理的接触をおこなわないため、レコードに傷をつけない。また、再生不能となったレコード盤を再生できる可能性がある。よって博物館等で保存するレコード盤の音源を後世に伝えることができる形式に変換できる可能性がある。短所としては、黒いビニル製レコードを使用する前提であり、カラー盤や透明な盤ではレーザーが反射せず透過してしまう点がある。

### 3. レコードに含まれるインパルス音の調査

#### 3.1 録音環境

レーザーターンテーブルは付属品のキャリブレーションレコードを用いてキャリブレーションを行なった後に再生した。再生音は、本体の背面に配置されているオーディオ端子（いわゆる RCA ピン）を経由して2チャンネルで出力した。同製品に内蔵されている RIAA(Recording Industry Association of America) イコライザを経由して出力した。

対象条件として、アナログレコードプレーヤを用いて記録した。用いた機材は、ヤマハ社製「YP-D10」である。

いずれの信号についても、出力された信号はオーディオインターフェイス（Roland 社 STUDIO-CAPTURE）を経由して USB で接続された PC に取り込み、PC 上のソフトウェア（ProTools12）で記録した。記録フォーマットは、WAV 形式（48kHz, 24bit）とした。なお、YP-D10 の RCA 出力端子には RIAA イコライザは含まれていないが、実験条件をそろえるために今回はどちらの出力も同様に記録した。

#### 3.2 インパルス音の比較

ここで調査するノイズは、いわゆる定常的なノイズではなく、プツツと入る音のことである。この音は click, pop, impulse などと呼ばれるが、本報告ではインパルスで統一する。最初にハンドラベリングによる調査を行なった。音響分析ソフトウェア「Sonic Visualiser」を用いて、記録した wav ファイルを読み込み、波形を見ながら聞こえたインパルスをカウントした。カウントしたのは本学学部生であった。用いた音源は、当館所蔵レコードではなく、流通量の多いポピュラー音源から選出し、太田裕美のアルバム「心が風邪を引いた日」に含まれる「THE MILKY WAY EXPRESS」を対象とした。楽曲の最終部が終わってから、2秒間に含まれるインパルスを音に対してハンドラベリングにより記録した。カウントした結果を図2に示す。

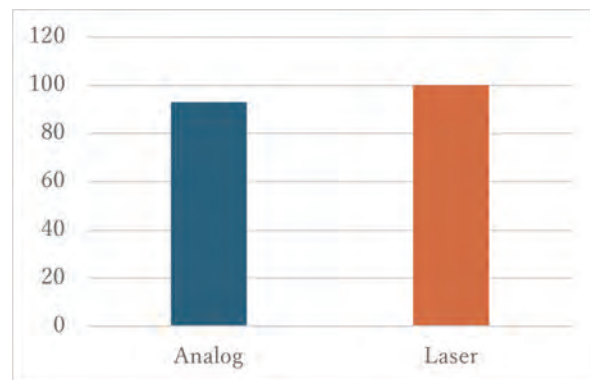


図2 ハンドラベリングによるインパルス音数の比較

縦軸はインパルス音の数、横軸はアナログまたはレーザーターンテーブルである。図2より、アナロ

グ記録よりもレーザー記録の方がインパルス音は多く検出された様子がわかる。これは過去 [3] において “The ELP ... is also reported to be highly sensitive to disc damage (clicks and pops)” と主張されていた内容と一致するものの、データは特に示されておらず、本報告で初めて明らかになる点と言える。

#### 3.3 推定

3.2で述べた手作業での検出では作業量の面から人手で行なうには現実的には困難であるため、人手による結果を推定する手法を用いて、大量の音源に対する調査を行なう方法が望ましい。そこでここでは3.2で述べたデータを正解データとした推定手法を考案した。手順は比較的簡単な手法であり、得られた時間波形をモノラル化し、得られた時間波形を一階微分し、振幅値の閾値を超えた回数を算出することとした。

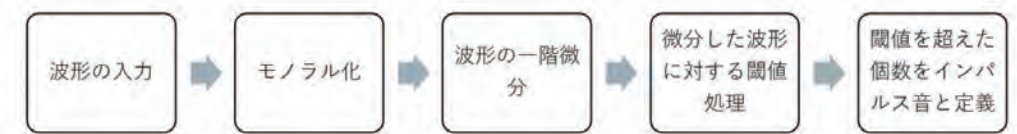


図3 インパルス音の推定手法のフロー

```
import numpy as np
import soundfile as sf
from scipy.misc import derivative
from scipy.interpolate import interp1d

filename = "audio.wav"
data, samplerate = sf.read(filename)
mono_sig = (data[:, 0] + data[:, 1]) / 2
times = np.arange(len(mono_sig)) / samplerate
interp_func = interp1d(times, mono_sig, kind='cubic', fill_value="extrapolate")
diff_data = np.array([derivative(interp_func, t, dx=1/samplerate) for t in times])
threshold_low = -100
threshold_high = 100
highlight_mask = (diff_data < threshold_low) | (diff_data > threshold_high)
```

図4 図3のpythonプログラムコード

#### 3.4 閾値の決定

閾値の決定においては、Precision と Recall を求める必要がある。Precision とは、「推定されたイン

パルス時刻のうち、実際のインパルス時刻と合致するケース数の割合」であり、Recallとは「全正解インパルス時刻のうち、実際に推定されたインパルス数の割合」である。例として、閾値を厳しく設定すると、Precisionを向上させることはでき、正解と出力された結果を高く信頼することができるが、そもそもの正解インパルスを取りこぼすことになるため、Recallは下がる。逆に閾値を緩く設定すると、推定されたインパルス音の数が増えるものの実際のインパルスと整合するケース数は下がるため、Precisionは下がり、正解インパルスを網羅することにはなるのでRecallは上がる。つまり、PrecisionとRecallは常にトレードオフの関係にあるため、ちょうどよいバランスの閾値を設定する必要がある。一般的にはF-measureやF値、またはF1スコアなどと呼ばれる指標に従って決定する。F-measureの式を(1)に示す。

$$F\_measure = 2 \times \frac{Precision \times Recall}{Precision + Recall} \quad (1)$$

閾値を設定し、PrecisionおよびRecallを求め、式(1)に従ってF-measureを求めた結果を図5に示す。横軸はアナログまたはレーザーターンテーブルであり、縦軸はF-measureである。図4より、F-measureは閾値100においてアナログおよびレーザーのいずれにおいても0.8を超える妥当な推定ができていたことが分かる。よって最適な閾値を100と暫定的に設定する。

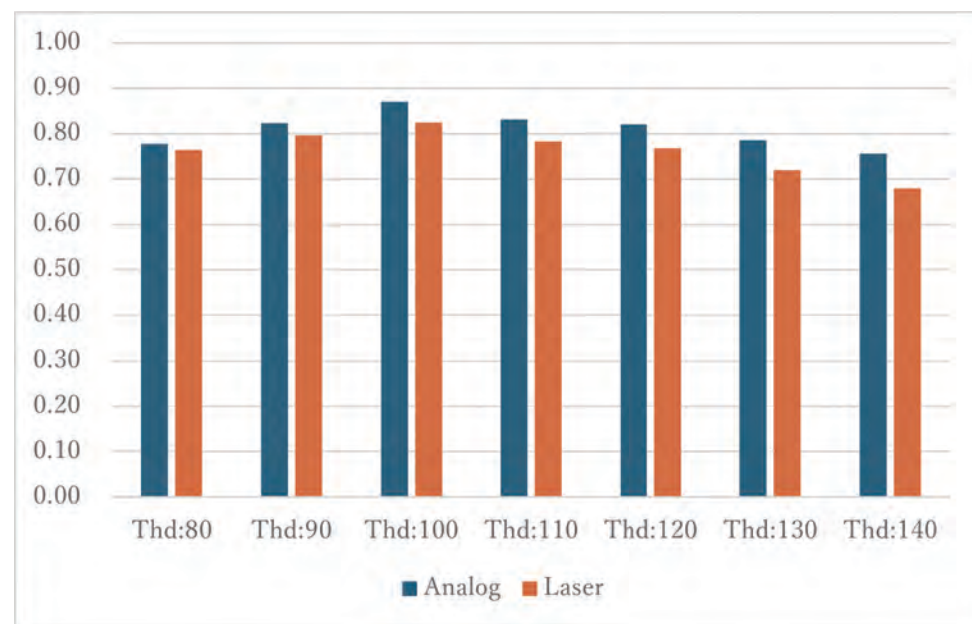


図5 インパルス判定における閾値とF-measureの関係

### 3.5 推定エンジンによるインパルス音の予測

3.4で述べた予測エンジンを用いて、異なる6通りのレコード盤(A~Fと表記)に対する評価を行なった。レコード盤に含まれるある楽曲の終端から無音区間2秒をカットし、その無音区間に含まれるインパルス音の数を予測した。予測した数は1秒当たりの回数に変換した。なお、無音区間の長さが2秒に至らない場合は1秒のみを抽出した。

調査の結果を図6に示す。横軸のラベルは「レコード盤、表(x)裏(y)の区別、(曲数)」を表す。例えば、Ax(5)とは、レコード盤Aの表(x)に含まれる全5曲の音源に対する結果を示す。縦軸は予測されたインパルス音数である。各ロッド上のティックは、95%信頼区間を表す。図6より、レコード盤Bを除くいずれのレコード盤においても、アナログ記録よりもレーザーターンテーブルによる記録の方がインパルス音の多い様子が分かる。

インパルス音が発生する要因には、埃、レコード盤の損傷、電気的なノイズなど様々な要因が考えられるが、レーザーターンテーブルの場合は物理的な接触がないために、埃や損傷による影響が強いと考えられる。一方でアナログレコードプレーヤの場合は、針及びカートリッジの重量により、振動に対するわずかなローパスフィルターの効果が期待できるので、結果的にノイズが軽減されている可能性がある。今回用いたレコード盤ではレコードクリーナーは特に使用しておらず、埃の影響が考えられる。また、Noise Blankerについては今回は特に使用していない。

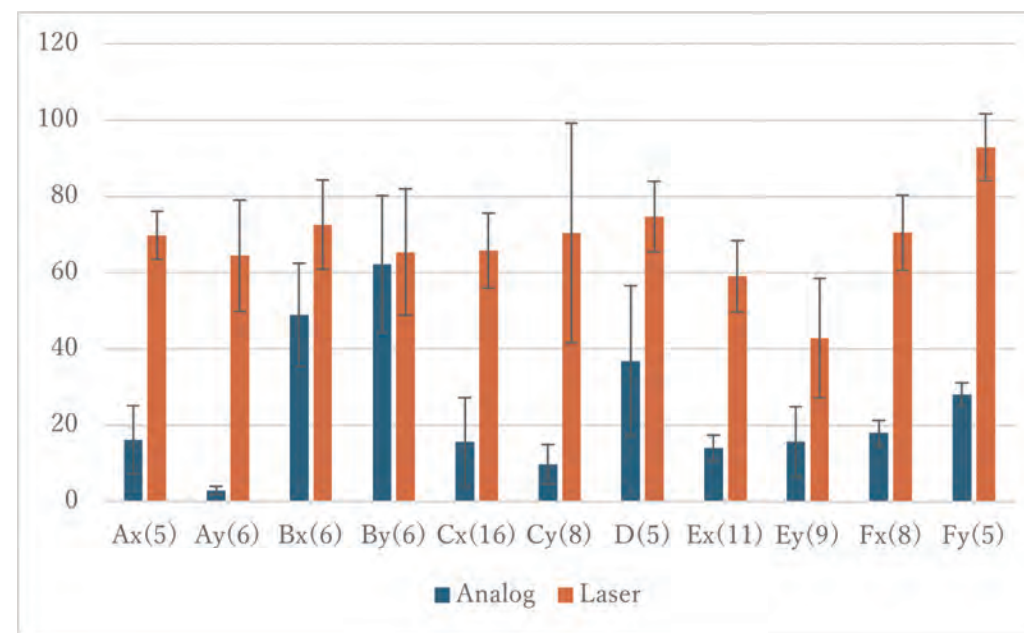


図6 インパルス音推定の結果

## 4. おわりに

レーザーターンテーブルから記録される波形に含まれるインパルス音の実測と簡易的な予測手法を提

案し、レコード盤6通りに対して調査を行なった。その結果、レーザーターンテーブルで記録した音響波形ではアナログレコードプレーヤと比較してより多いインパルス音が混入することが明らかになった。今後はRIAAイコライザの条件をそろえた音質の比較を行ない、レーザーターンテーブルによるビニル盤レコードの音源化に関する知見を広げたい。

#### 参考文献

- [1] Heine, W. K. (1977, May). A laser scanning phonograph record player. In Audio Engineering Society Convention 57. Audio Engineering Society.
- [2] Li, B., Smith, J. B. L., & Fujinaga, I. (2009). OPTICAL AUDIO RECONSTRUCTION FOR STEREO PHONOGRAPH RECORDS USING WHITE LIGHT INTERFEROMETRY. ISMIR2009, Poster Session.
- [3] Chenot, J.-H., Laborelli, L., & Noiré, J.-É. (2018). Saphir: Optical Playback of Damaged and Delaminated Analogue Audio Disc Records. Journal on Computing and Cultural Heritage, 11(3), 1–29. <https://doi.org/10.1145/3183505>
- [4] 三浦雅展. (2024). アナログレコード音源と高解像度音源に対する印象評価. 日本音響学会誌, 80(6), 331–335. [https://doi.org/10.20697/jasj.80.6\\_331](https://doi.org/10.20697/jasj.80.6_331)
- [5] エルプ社ホームページ, <https://laserturntable.co.jp/turntable/master1.html> (2026.1.29 参照)

## 活動報告

7

### 国立音楽大学創立100周年記念事業「歴史的ピアノへのアプローチ ～くにおんフォルテピアノで新たな世紀へ～ プロジェクト」報告

宇井 紗也香

## 1. はじめに

本項目では、国立音楽大学創立100周年記念事業として行った「歴史的ピアノへのアプローチ～くにおんフォルテピアノで新たな世紀へ～ プロジェクト」について報告する。

## 2. 国立音楽大学創立100周年記念事業「歴史的ピアノへのアプローチ～くにおんフォルテピアノで新たな世紀へ～ プロジェクト」

### 2.1 概要

国立音楽大学は2026年に創立100周年を迎える。創立100周年記念事業として、当館ではアン・ワルターのフォルテピアノを複製し、その楽器を用いたイベントを4つ開催した。

### 2.2 くにおんフォルテピアノ

当館は19世紀のフォルテピアノを多数所蔵し、研究・教育に活用しているが、鍵盤楽器の歴史を学ぶ授業での使用や、モーツァルトやベートーヴェンの演奏研究を目的に、“演奏できる18世紀後半のフォルテピアノ”が求められていた。この時代にウィーンで活躍し、高い評価を受けていたピアノ製作者の一人にガブリエル・アントン・ワルター (Gabriel Anton Walter, 1752–1826) がいる。ワルター製のオリジナルのピアノは現存数が限られているうえ、長い歳月が経過しているため演奏での使用を制約せざるを得ない。そこで、鍵盤楽器製作者・修復家で本学講師の太田垣至氏に依頼し、A.ワルターが1795年頃に製作し、現在ニュルンベルク博物館に所蔵されている楽器 (MINE109) の複製を製作いただいた<sup>1</sup>。

楽器の一部には、本学のシンボルツリーとして長年愛され、新校舎建設時にやむなく伐採された木材を使用している。これは、本学准教授でおられた故・森太郎先生が立ち上げた「くにたち未来プロジェクト」という、大学構内で伐採された樹木を楽器として再生させるプロジェクトの意志を引き継いだものだ。この楽器を通じて音楽教育の充



<sup>1</sup> 製作の詳細は、本書6～9ページ「くにおんフォルテピアノの製作について」を参照いただきたい。

実と音楽文化の発展に寄与することを誓い「くにおんフォルテピアノ」と名付けた。

## 2.3 くにおんフォルテピアノを用いたイベント

くにおんフォルテピアノを使用したレクチャーコンサートを3回開催した。各回は異なる視点から、くにおんフォルテピアノにアプローチできるよう企画した。

また、フォルテピアノを学ぶ機会として、本学学部生・院生、附属中学・高校生を対象に5日間に渡るサマースクールを開催した。レッスン及び修了演奏会は学内に限らず広く公開した。

## 2.4 その他

2025年度前期企画展示はアントン・ワルターのフォルテピアノにちなみ「ピアノ製作家たちの偉業 ～古典派の作曲家が求めたピアノと音楽」を開催した<sup>2</sup>。

毎年製作しているオリジナルクリアファイルのA5サイズと利用案内は、くにおんフォルテピアノを用いたデザインにしたほか、オリジナル缶バッジを製作し、イベントの際などに配布した。



## 3. レクチャーコンサート

### 3.1 くにおんフォルテピアノお披露目コンサート ～フォルテピアノでの演奏体験を現代のピアノに活かす～



日時：2025年4月18日（金）開演 18：30

開催場所：国立音楽大学講堂小ホール

出演者：久元祐子（フォルテピアノ、ピアノ、お話）／永峰高志（ヴァイオリン）／長島剛子（ソプラノ）

入場料：無料（要予約）

入場者数：367名 ※楽器の特性を考慮し、席数を制限

「お披露目コンサート」というタイトル通り、くにおんフォルテピアノの初披露の場となった本公演。新たに複製したA.ワルターのフォルテピアノ「くにおんフォルテピアノ」について、その製作経緯や楽器の特徴について紹介するとともに、フォルテピアノを学ぶことによって得られる音楽的・教育的意義を来場者に体感していただくことを目的とした。これにより、フォ

<sup>2</sup> 詳細は、本書60ページを参照いただきたい。

ルテピアノを通じた教育活動への理解と関心を一層深めることを目指した。

そのような意図を持つ本公演は「フォルテピアノでの演奏体験を現代のピアノ演奏に活かす」をテーマにし、本学特任教授である久元祐子先生にレクチャーを交えて演奏いただいた。プログラムは下記の通り。

W. A. モーツァルト 《幻想曲》ニ短調 K. 397

L. v. ベートーヴェン 《7つのバガテル》Op. 33 より第3番 へ長調

L. v. ベートーヴェン 《ピアノ・ソナタ》第12番 変イ長調 Op. 26 「葬送」

W. A. モーツァルト 《ヴァイオリン・ソナタ》ト長調 K. 379

W. A. モーツァルト 《すみれ》K. 476

W. A. モーツァルト 《ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼いた時》K. 520

W. A. モーツァルト 《夕べの想い》K. 523

W. A. モーツァルト 《春への憧れ》K. 596

ステージ上には、くにおんフォルテピアノと現代のピアノを並べて配置した。

久元先生は2台の実演を交えながら、A.ワルターのフォルテピアノ（くにおんフォルテピアノ）と現代のピアノとの違い、当時の楽器から学び得られること、現代のピアノで演奏する際の活かし方など、とても分かりやすく、丁寧に解説くださった。



また、ソロ演奏だけではなく、本学特任教授の永峰高志先生（ヴァイオリン）、本学教授の長島剛子先生（ソプラノ）とのアンサンブルも演奏くださった。「アンサンブルのくにおん」としてアンサンブルの教育にも力を入れている本学の特色が溢れるコンサートになった。また、ピアノ専攻者のみならず他専攻の学生も、当時の楽器のピッチの違いや、響きの違いなど、「当時の楽器を知る」ということの意義に関心を持つきっかけになったのではないだろうか。実際に、8月に開催した、くにおんフォルテピアノのサマースクールの受講者（ヴァイオリン）の志望動機には、「お披露目コンサートで永峰先生の演奏を聴いて、フォルテピアノと一緒に演奏してみたいと思った。調弦を緩ませることにより、音が柔らかくなり表現の幅が大きくなるように感じた。」との記述があった。

アンコールでは、モーツァルト《春への憧れ》の日本語版を、出演者の3名による演奏に加え、会場の皆様で歌い、盛大に終演した。感動の声がたくさん届き、次公演の予約の申し込みも次々と入り、反響が非常に大きかった。



### 3.2 トマシュ・リッテル くにおんフォルテピアノリサイタル



日時：2025年6月27日（金）開演 18:30  
 開催場所：国立音楽大学講堂小ホール  
 出演者：Tomasz Ritter（トマシュ・リッテル）  
 入場料：無料（要予約）  
 入場者数：319名 ※楽器の特性を考慮し、席数を制限

ポーランドの若手ピアニスト、トマシュ・リッテル氏によるリサイタル。リッテル氏は2018年にショパン国際ピリオド楽器コンクールで第1位受賞に加え、2024年8月にブルージュ国際古楽コンクールでも第1位を受賞。古典からロマン派までの演奏が評価された、世界の注目を集めるピアニストが奏でる「くにおんフォルテピアノ」を堪能できる本公演は、公演前から反響が大きく、公演1カ月半ほど前に定員に達し、キャンセル待ちの問い合わせが相次いだ。リサイタルのプログラムは、「くにおんフォルテピアノ」の音域(F<sub>1</sub> - g<sup>3</sup> 63鍵)などに基づき、リッテル氏が選曲くださった。プログラムは以下の通り。

- F. レッセル 《幻想曲》ハ長調 Op. 8
- W. A. モーツァルト 《ピアノ・ソナタ》第6番 ニ長調 K. 284
- L. v. ベートーヴェン 《ピアノ・ソナタ》第1番 ヘ短調 Op. 2-1
- L. v. ベートーヴェン 《ピアノ・ソナタ》第14番 嬰ハ短調 Op. 27-2 「月光」

圧巻の演奏に、会場は大きな拍手に包まれた。また、本公演では演奏後のリッテル氏に、事前に学生から募集した質問にお答えいただいた。通訳は、フォルテピアノ奏者として活躍される、本学講師の平井千絵先生に依頼した。

古典派、ロマン派とさまざまな時代のフォルテピアノをどのように弾き分けるかという質問には、練習あるのみということに加え、バロック時代、古典派時代の鍵盤楽器の繊細なタッチを学ぶことが、その後の時代のピアノ演奏にも役に立つとお答えになった。モスクワ音楽院時代に、モダンピ

アノに加え、チェンバロやフォルテピアノを学んだリッテル氏。さまざまな楽器を弾きわけることは簡単ではないものの、その経験はモダンピアノ奏者にとっても生きるということ、強調されていた。現在、第一線で活躍されている若手ピアニストからのご自身のご経験をアドバイスに、良い刺激もらった学生も多かっただろう。



### 3.3 フォルテピアノと探求する 古典派のピアノ作品



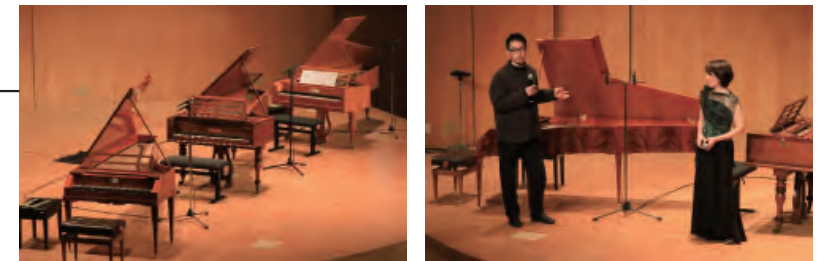
日時：2025年12月11日（木）開演 18:30  
 開催場所：国立音楽大学講堂小ホール  
 出演者：平井千絵  
 入場料：無料（要予約）  
 入場者数：325名 ※楽器の特性を考慮し、席数を制限

2025年度を締めくくるコンサートとなった本公演は、「くにおんフォルテピアノ」に加えて、当館所蔵の1820年頃のブロードウッド（登録番号0254 John Broadwood & Sons c. 1820オリジナル）、1839年頃のグラーフ（登録番号2562 Conrad Graf c. 1839 コーバルト兄弟2000年頃複製）、計3台を用いたレクチャーコンサート。

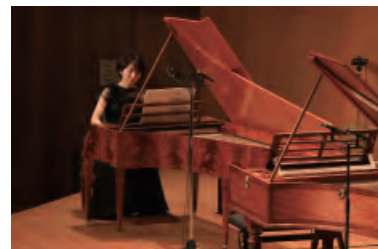
古典派の時代に焦点を当て、フォルテピアノの聴き比べや、各楽器の特性、演奏習慣に迫る。現代ピアノとの比較ではなく、複数台のフォルテピアノを通じて、古典派の時代のピアノ作品を探求することが、4月のお披露目コンサートとの大きな違いだ。本学講師でありフォルテピアノ奏者の平井千絵先生に演奏とお話を、また、「フォルテピアノの音色聴き比べと解説」のコーナーでは、くにおんフォルテピアノの製作者である太田垣至氏にもご登壇いただいた。

プログラムは下記の通り。

- W. A. モーツァルト 《フランスの歌「ああ、お母さん聞いて」》による12の変奏



曲（きらきら星変奏曲）ハ長調 K. 265 K6. 300e (a)



フォルテピアノの音色 聴き比べと解説

- ① L. v. ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ》第14番 Op. 27-2 「月光」 第1楽章より抜粋
- ② J. フィールド《ノクターン》イ長調 H 36 より抜粋
- ③ L. v. ベートーヴェン《バガテル》WoO 59 より抜粋

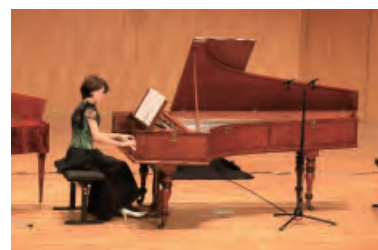
F. J. ハイドン《アンダンテと変奏曲》へ短調 Hob. XVII:6 (a)

F. シューベルト《ピアノ・ソナタ》第16番 イ短調 D845 Op. 42 より第1楽章、第2楽章 (c)

第1楽章 Moderato  
第2楽章 Andante, poco mosso

L. v. ベートーヴェン《ピアノ・ソナタ》第31番 変イ長調 Op. 110 (b)

第1楽章 Moderato cantabile molto espressivo  
第2楽章 Allegro molto  
第3楽章 Adagio ma non troppo



使用楽器

- (a) グランドピアノ ワルター製作 1795年頃 2025年 太田垣至氏 複製(くにおんフォルテピアノ)
- (b) グランドピアノ ブロードウッド製作 1820年頃
- (c) グランドピアノ グラフ製作 1839年頃 2000年 コーバルト兄弟 複製

各楽器に関わりの深い作曲家の作品を平井先生が選曲くださった。アンコールはジョン・ケージの《夢》。フォルテピアノとの意外な組み合わせとその世界観は、多くの人の印象に残ったようだった。大きくあたたかな拍手に包まれ、終演した。

各楽器の魅力を引き出す演奏に感動の声が多く届いたほか、太田垣氏の分かりやすい解説、資料館ならではの濃密な内容に大満足という声など、高い評価が伺えた。なお、本公演では全20ページのプログラムを配布した。平井先生の詳細なプログラムノート、太田垣氏のくにおんフォルテピアノ複製製作についての記述に加え、各楽器を比較できるように、基本情報を写真や図を用いてまとめ掲載した。プログラムに関しても大変充実した内容に多くの反響があった。



#### 4. くにおんフォルテピアノサマースクール



日程：2025年8月25日(月)～8月29日(金)  
場所：国立音楽大学(楽器学資料館展示室・スタジオ/新一号館オーケストラスタジオ)  
講師：平井千絵/飯島聡史  
受講生：国立音楽大学生・院生/附属中学・高校生(合計11組)  
部門：ソロ/アンサンブル  
内容：期間中に講師によるレッスンを3回受講し、最終日に修了演奏会に出演する。

現代のピアノとは音色、タッチ、演奏習慣など多くの点で違いがあるフォルテピアノ。年間を通じてレクチャーコンサートを開催し、それらから学びを得てもらう機会は設けたが、“実際にフォルテピアノを演奏する”という経験によって得られる

気づきや発見の意義がきわめて大きいことは言うまでもない。フォルテピアノを集中的に学ぶ機会を提供するため、5日間のフォルテピアノでの演奏を学ぶためのサマースクールを開催した。

講師には、平井千絵先生、そして、補佐講師として、本学卒業生でフォルテピアノでの活動も精力的になさっている飯島聡史先生にご助力を仰いだ。

受講生は本学学部生・院生から選抜したほか、附属中学・高校生から3組の推薦をいただいた。学部生・院生は志望動機によって選抜したが、意欲的な学生が多く、当初の予定よりも枠を増やし9組としたため、合計11組となった。

受講曲は原則、課題曲からの選択制とした。平井先生にご指定いただいた課題曲は下記の通り。

フォルテピアノ ソロ

- 1 Mozart ソナタ K. 279 第2楽章
- 2 Mozart きらきら星変奏曲 K. 265 (Var 3、4、6、7を除く)
- 3 Beethoven ソナタ Op. 27-2 (月光) 第1楽章
- 4 Mozart ソナタ K. 330 第2楽章
- 5 Mozart ソナタ K. 332 第2楽章
- 6 Mozart ソナタ K. 576 第2楽章

学年に応じて下記から選択のこと。

- 中学生 1、2、3
- 高校生 1、2、3

学部生 3、4、5、6  
院生 1、4、5、6

アンサンブル

歌曲

Haydn Hob. XXVIa:25-36 から1曲任意選択  
Mozart Abendempfindung K. 523

デュオ

Mozart クラヴィアとヴァイオリンのためのソナタ K. 301 第1または第2楽章  
Mozart クラヴィアとヴァイオリンのためのソナタ K. 304 第1または第2楽章

トリオ

※ヴァイオリン、チェロの学部生、院生でぜひ参加したいと意欲のある学生が複数いる場合に対して、トリオでの参加も可能とした。

Haydn Trio in A major Hob. XV:9 第1楽章 Adagio  
Haydn Trio in G major Hob. XV:25 第2楽章 poco Adagio

6月には受講者を対象に事前説明会を実施。平井先生にもお越しいただき、フォルテピアノの演奏をするうえでの心構え等説明いただいた。事前説明会は録画をし、附属中学・高校の受講生にも共有した。本学学生は普段より、予約によりフォルテピアノを試奏できるため、受講前からの準備として活用方法を再度伝えたほか、附属中学・高校の受講生には事前に1度弾いてもらう機会を設けた。

サマースクール5日間のスケジュールは下記の通り。

8月25日(月)

- ・講師によるオープニングコンサート
- ・平井先生によるレッスン
- ・飯島先生のサポートつき練習

8月26日(火)～28日(木)

- ・平井先生によるレッスン
- ・飯島先生のサポートつき練習

8月29日(金)

- ・練習

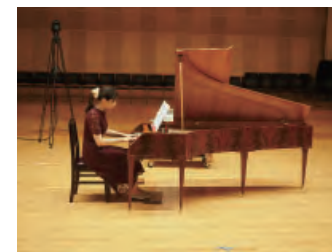
- ・会場リハーサル(先生方の立ち合いあり)
- ・修了演奏会

サマースクール期間中は、受講者がレッスンと練習の機会を各3回受けられるよう設けた。練習用のピアノは、くにおんフォルテピアノと同様のモデル、A.ワルター c.1795年の複製(太田垣至2023年複製)を、太田垣氏にお借りした。現代のピアノとは異なる点の多いフォルテピアノに、受講生には最初戸惑いの様子も見られたが、先生方からのご指導を経て、次々と演奏技術を吸収し、自らのものにしていった。また、弦楽器や声楽の受講生も、430Hzのピッチという新しい経験に、試行錯誤しながら前向きに取り組んでいた。



聴講は学内関係者に限らず、どなたでも申し込み可能にした。5日間合計7枠を設け、スペースの関係上、1枠10名までの制限を設けた。申込みは先着順、1人1枠までに制限をした。幅広い年齢層、また、遠方から見えた方もいらっした。

修了演奏会も他のレクチャーコンサートと同様にチケットサイトteketを利用し、予約を受け付けた。会場は受講者を含め60名以上となりほぼ満員になった。受講生はサマースクール期間の集大成として演奏を披露し、大きな拍手が鳴り響いた。



受講生の演奏後は、講師のお二方の素晴らしい演奏と5日間のご講評をいただいた。

平井先生より、「それぞれの個性のある音楽観に触れて、本当に刺激的な1週間だった」というお言葉とともに、受講生がどれくらい大きな挑戦を成し遂げたかについて言及があった。現代のピアノ演奏とは違う価値観のもと、楽器のサイズ、音の減衰、タッチ、ピッチなどさまざま異なる楽器で、受講生たちが恐怖や不安を果敢に取っ払い、自分の音楽を表現していたことに、平井先生から大きな賞賛がおくられた。

来場者からは、「とても素晴らしい演奏会だった。若い方がビリオド楽器に懸命に取り組んでおられることに感激した。」などのお声が届くほか、受講生からも「フォルテピアノを学ぶ貴重な機会です、とても充実した期間だった」という声が届いた。当館では来年度以降も、サマースクールを

継続していく予定だ。



## 5. 各イベント会場の温湿度対応について

### 5.1 講堂小ホール

4月開催「くにおんフォルテピアノお披露目コンサート」では、楽器に関わる大きな影響はなかったが、定員満員の会場は温度が上昇。しかし、4月はまだ冷房が入れられないため、換気のみをまわしての対応をとった。

6月開催「トマシュ・リッテル くにおんフォルテピアノリサイタル」は、梅雨時期で心配があったものの、天候には恵まれた。しかし、ステージ上の湿度が想定以上に低かった。これをふまえ、次公演にむけて対策を考えた。

12月開催「フォルテピアノと探求する 古典派のピアノ作品」は、開催前から急激な湿度低下を懸念していた。冬場の会場は、お客さんが入り、暖房を入れると照明も相まって、温度が26℃ほどまで上昇、それに伴い湿度も30%近くまで下がることが見込まれていたからだ。換気のため、暖房を入れることは避けられず、当館では事前対策として、展示室の温湿度の設定を変更し、湿度を通常より低い45%ほどになるよう、段階を踏んで徐々に調整を行った。これにより、湿度の急激な変化を少しでも抑えることを試みた。

演奏会当日はデータロガー子機を1台常に楽器のそばに置き、こまめに確認。ステージ上に水を撒くほか、客席にも霧吹きを度々行い、湿度低下対策を行った。その結果、湿度40～45%に落ち着き、無事に演奏会を乗り切ることができた。

### 5.2 楽器学資料館スタジオ（サマースクール期間の練習室）

サマースクール期間の練習室会場となった当館の「スタジオ」は、24時間空調の設定ができない。勤務時間内は空調で調整が行えても、それ以外の時間に高湿度になることが課題だった。会期前からスタジオの温湿度を計測し、その結果、部屋を閉め切るときは小型の除湿器を稼働させ、それ以外のときは、スタジオのドアを開けた先にあるロビーの大型除湿器を稼働させる対応をとった。

なお、期間中は毎日終了後にスタジオにおいている練習用のピアノを、展示室に移動させた。それらのこともあり、期間中、大きな問題なく終えることができた。

### 5.3 国立音楽大学オーケストラスタジオ

サマースクールの修了演奏会を開催したオーケストラスタジオは、当日70%ほどの高湿度となった。通常はそのようなことはなく、突然の事態であった。除湿器を稼働するほか、サーキュレーターをまわすなど、できる限りの対応はしたが、会場が広いため、湿度はあまり下がらなかった。高湿度の影響で、リハーサル時に楽器への影響が見られた（ピアノのダンパーが下がらない音が出てきてしまった）。

万が一の場合に備えて、太田垣先生からお借りしていた練習用ピアノを会場に運んでおき、いつでも替えられるようにした。そして、開演前には太田垣先生より来場者へ、フォルテピアノが温湿度にデリケートな楽器であることとともに、現状についてお話があった。結果として終演までくにおんフォルテピアノのみで乗り切ることができたが、お客さんが暑そうだったり、弦楽器のチューニングが大変そうだったりした。

今回の現象を踏まえて、来年度開催の場所は別の会場を仮押さえし、9月に温湿度の計測も行った。

## 6. コンサートの定員上限の調整と無断キャンセルの問題

くにおんフォルテピアノを用いたコンサートは計3回ともに大きな反響があった。しかし、無料のコンサートということもあり、当日無断キャンセルも多く、来場者数の予測と定員上限の調整は、回数を重ねながら試行錯誤で行うこととなった。

本学講堂小ホールは、500席のホールだが、フォルテピアノの特性上、良い響きの演奏を提供するには上限300名ほどにする必要がある。今回は基本そのような方針であったが、4月の「くにおんフォルテピアノお披露目コンサート」に関しては、「お披露目」ということもあり、多くの方へご来場いただくことを加味して、450名を上限とした。公演数日前には、450名の定員に達し、申し込み受付を終了した。しかし、いざ蓋を開けてみると、来場者数は367名だった。通常よりも多い上限にしていたため、聴こえ方の面からみると結果的に良かったものの、数日前に定員に達し、受付終了した際、キャンセル待ちのお問い合わせが複数あったことを踏まえると残念でならない。なお、キャンセル待ちは設けていなかった。

このことを受け、次の開催となる「トマシュ・リッテル くにおんフォルテピアノリサイタル」の定員の上限設定を見直した。この公演は、300名を上限調整すべく、無断キャンセルがあることを想定し、定員の上限を400名に設定した。大変反響があり、開催日の1カ月前より前に400名の上限に達した。その後も、お問い合わせが相次いだ。キャンセル待ちはしない方向で対応した。ただし、学内者に限り、5分前の段階の様子次第で入場可ということにした。結果、当日飛び込み20名を含め、319名となり、おおよそ推測通りとなった。言い換えれば、本公演も100名近くの無断キャンセルがあったこととなる。

これらのことを踏まえ、「フォルテピアノと探求する 古典派のピアノ作品」の定員の上限を再考した。今回は、チケット申し込み受付を、今までの公演の受付日より数カ月前、8月末から開

始していた。リピーター獲得のため、平井先生が講師を務めてくださった「くにおんフォルテピアノサマースクール」の修了演奏会の日に合わせて設定したからだ。さらに、12月という時期的に感染症も増加することが予想された。それらを考慮すると、今までの公演よりもキャンセル者が増加する可能性が考えられたため、様子を見ながら、最終的には定員の上限を430名とした。

それとともに、無断キャンセル者の減少を目指し、開催数週間前に、申込み者に一斉メールでキャンセルがある場合のご連絡を促した。多くのご連絡をいただくことができ、予想がつきやすくなった。また、当日キャンセルがあった場合に限り、開演5分前にご案内するという条件でご了承いただけた方に、事前に用意した整理券をお渡ししてご案内する対応をとった。

結果、当日の来場者は325名だった。事前キャンセル連絡は47件あったものの、それ以上、当日無断キャンセルがあったこととなる。無料のコンサートであることが故の課題に苦戦した1年となった。来年度以降は、有料化も検討する予定である。

## 7. おわりに

多くの方のお力添えを賜り、楽器学資料館主催の国立音楽大学創立100周年記念事業「歴史的ピアノへのアプローチ ～くにおんフォルテピアノで新たな世紀へ～ プロジェクト」は盛大に終わることができた。この場を借りて謹んで感謝申し上げたい。

多くの方々に、国立音楽大学100周年を記念して製作した「くにおんフォルテピアノ」を周知できたとともに、大学附属博物館として、教育および研究活動を周知できた機会となった。今年度のプロジェクトを通して得た知見や課題は次年度以降にも大きく役立つだろう。プロジェクトは終了したが、今後も当館は、くにおんフォルテピアノを通じて、音楽教育の充実と音楽文化の発展に寄与していく所存である。

## 活動報告

8

### 2025年度活動報告

武田 有里

## 1. はじめに

前項目「国立音楽大学創立100周年記念事業『歴史的ピアノへのアプローチ ～くにおんフォルテピアノで新たな世紀へ～ プロジェクト』報告」で報告したイベント以外の、2025年度の活動について本項目では報告する。概要は巻末の「2025年度活動報告概略」にもまとめているが、本項目ではその内容を詳述する。

## 2. 企画展示

### 2.1 前期企画展示「ピアノ製作者たちの偉業 ～古典派の作曲家が求めたピアノと音楽～」

会期：2025年4月16日（水）～2025年7月30日（水）

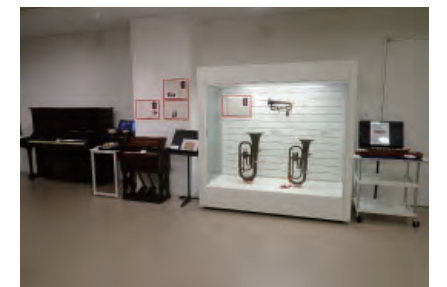
本学創立100周年記念事業で複製したアントン・ワルター製グランドピアノ、通称「くにおんフォルテピアノ」の完成にちなみ、古典派の時代のピアノ製作者をテーマとした展示をおこなった。パネルでは、ピアノの歴史や各時代のアクション等の変遷を、同時代の作曲家や作品と関連づけて学べるよう解説をまとめた。ワルターのアクション模型や図面も展示し、鍵盤楽器の歴史や構造を学ぶ授業で度々取り上げられた。また、ワルターのオリジナルの製作年（1795年頃）とほぼ同じ頃に製作された弦楽器や、モーツァルトの《ピアノと管楽のための五重奏曲》に編成される管楽器を展示した。



### 2.2 後期企画展示「楽器とめぐる明治・大正・昭和」

会期：2025年10月1日（水）～2026年2月4日（水）

明治～昭和初期の日本において当時どのような楽器が製作され普及していったのかに焦点を当てた展示である。信号喇叭などの金管楽器、ピアノ、リードオルガンの展示には、幕末や明治初期に西洋文化の一部として伝わったのち国内でも製作された背景についての解説をキャプションで加えた。また、この時期に一般の人々の間に広まった楽器として、尺八や筑前琵琶な



ども取り上げ展示した。さらに、明治・大正期に日本で考案された楽器として、紙腔琴と大正琴も展示した。

横浜外国人居留地を拠点としたメーカーのピアノの展示においては、横浜市立図書館と横浜開港資料館に、居留地の様子がわかる地図や絵はがきの写真をお借りし、パネル展示をさせていただいた。

## 2.3 ラウンジ展示「音大生なら知っておきたい世界のアンサンブル ～アジア編～」

会期：2025年4月1日（火）～2026年2月12日（木）

音楽の教員採用試験で取り上げられることの多い民族楽器を、「アンサンブル」というテーマで取り上げ、展示した。今年度はアジア編として、ダウル・ズルナ（トルコ）、オルティン・ドー（モンゴル）、ヒンドゥースターニー音楽とカッターリー（インド）、ピーパート（タイ）、ノンアクとサムルノリ（朝鮮半島）を取り上げた。展示楽器には、授業で学生が見学する機会があったものも多かった。今後は、ほかの地域のアンサンブルも展示の候補としたい。



## 3. バーチャル展示室「Matterport®」の公開と運用

2024年度末に完成し当館ウェブサイトで公開した、バーチャル展示室「Matterport®」は、ウェブ上で当館の展示風景を閲覧できるものである。現在、常設展示エリアと、過去3回分の企画展示をそれぞれ公開している。トップページにあたる常設展示エリアは、ページの作成時から2026年1月8日までのアクセス数が1500件以上、1日あたり約1.5回表示されていた。企画展示エリアの表示数は、各ページ約100～300件であった。

約1年間バーチャル展示室を公開したなかで、個人や団体での展示室見学を検討している方に見学の見通しをたてるうえで役立てていただいた場面が何度もあり、来館の促進に役立っている。今後も更新と活用を継続していきたい。

## 4. 夏休み特別企画 第18回子ども見学会「リコーダーでバロック音楽をたのしもう！」

日時：7月24日（木） 1回目 10:20～12:30 2回目 13:50～16:00

場所：国立音楽大学楽器学資料館

講師：向江 昭雅（リコーダー）／坪田 一子（ヴィオラ・ダ・ガンバ）／長久 真実子（チェンバロ）／楽器学資料館学芸員

入場料：無料

参加者数：23名

夏休み特別企画「子ども見学会」は、小学4年生から中学3年生を対象とした展示室見学・楽器体験イベントであり、毎年7月下旬に開催している。2024年度に開催した「リコーダーでバロック音楽をたのしもう！」では、定員を越える申し込みがあり、参加がかなわなかった方もみられたため、今年度も引き続き同様のテーマで開催した。今年度は、参加申し込み受付と抽選にチケットサイト「teket（テケト）」を使用した。

講師の向江昭雅先生、坪田一子先生、長久真実子先生には、テレマンやヘンデルなどの作品の演奏と、リコーダー、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロについての解説をお願いした。参加者はリコーダーの知られざる一面や新たに出会う楽器に驚きの表情を見せつつも、興味深そうに演奏や解説を聴いていた。

また、参加者には、アンサンブル体験の課題曲としてヨハン・パッヘルベル作曲《カノン》の楽譜を事前に渡し、練習をお願いした。当日は、全員でのアンサンブルに加え、参加者が少人数で前に出て先生方と演奏する時間を設けた。参加者は、最初は緊張の表情を見せていたものの、演奏が始まると真剣かつ楽しそうにアンサンブルに取り組んでいた。

続いて、「バロック時代の楽器」をテーマとした、楽器学資料館学芸員による展示室のガイドツアーを実施した。チェンバロのプレクトラムや、低音域の大きなグレート・バス・リコーダーを取り上げるなど、先生方のお話からさらに学びを深められるようなガイドを組んだ。また、リュート、フラウト・トラヴェルソ、パイプオルガンなど、バロック時代に演奏されていたさまざまな楽器も紹介した。

参加者からは楽器についてたくさん質問が挙がり、保護者の方からは「心に残る体験になったようだ」などの感想が寄せられた。小学校や中学校の音楽の授業ではおなじみのリコーダーが、最盛期のバロック時代にはどのように演奏されていたか、参加者が関心を広げるきっかけになれば幸いである。



## 5. 教育用映像撮影

展示室端末での視聴や、授業への貸し出しが可能な、楽器についての演奏・解説映像の撮影を実施した。

### 5.1 サバールドラム

撮影日：5月16日（金）

演奏者：ワガン・ンジャイ・ローズ／ヤクバ・ジャバテ／モハ



メド・ンジャイ・ローズ／内藤太郎

セネガルやガンビアで演奏される太鼓「サバル」について、チューニングや演奏の方法を、実演付きで解説いただいた。また、セネガルのトーキングドラム「タマ」についても、どのような情報伝達に使われるのかなどお話いただいた。

## 5.2 アイヌの伝統楽器

撮影日：6月13日（金）

演奏者：千葉伸彦（トンコリ）／恵原詩乃（ムックリ）

5弦の撥弦楽器「トンコリ」と、口琴「ムックリ」の映像を撮影した。インタビューでは、各楽器の演奏方法や、背景となるアイヌ民族の考え方などをお話いただいた。



## 6. 授業利用

当館は本学の授業利用に対応しており、今年度も累計72回の利用があった。

例えば、楽器学の授業では、座学で取り上げられた楽器の実物を観察または試奏する授業を楽器学資料館で実施している。展示していない楽器でリクエストのあったものは、可能な限り収蔵庫から出して対応した。

また、鍵盤楽器の歴史をテーマとする授業では、クラヴィコード、チェンバロ、18世紀末～19世紀のピアノについて解説し、いくつかの楽器の試奏にも対応した。特に今年度からは、本学100周年記念事業で製作したアントン・ワルターのピアノが加わり、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの楽曲をテーマとする授業で多く取り上げられた。

## 7. 附属中学校邦楽体験

2024年度に本学附属中学校より依頼を受けて実施した中学2年生対象の邦楽体験を、今年度も引き続き、2つのプログラムでおこなった。

まず、本学講師の福原流笛方の福原寛先生による篠笛と小鼓の授業である。篠笛は、以前「子ども見学会」で使用したプラスチック製の篠笛を用意し、小鼓は本学の授業で使用するものを借用した。昨年度からの変更点としては、演奏体験をより深めてもらえるよう、生徒の体験する楽器を2つに絞った。そして楽器学資料館では、日本、琉球、アイヌの楽器の見学ツアーを実施した。解説した楽器は下記のとおりで、一部の楽器は試奏の時間も設けた。

- ・ 雅楽の楽器（笙、篳篥、龍笛、鞆鼓、楽太鼓、鉦鼓）
- ・ 薩摩琵琶

- ・ 三曲合奏の楽器（箏、三味線、尺八、胡弓）
- ・ 琉球の楽器（三線、三板、パーランクー）
- ・ アイヌの楽器（ムックリ、トンコリ）

当日は、附属中学校から2年生の生徒と先生が51名来学した。篠笛と小鼓の体験や、展示室での試奏が、生徒たちの印象に残ったようだ。

邦楽体験は次年度も実施予定である。より良い体験ができるよう内容をブラッシュアップしながら、準備に努めていく。

## 8. 博物館実習

当館では、本学または他大学に在籍し学芸員課程を履修している学生に対して、博物館実習を受け入れている。今年度も前期と後期の2回、博物館実習を実施した。

前期

日程：5月20日（火）～27日（火） ※土・月曜を除く計6日間

人数：5名

後期

日程：10月7日（火）～14日（火） ※土・月曜を除く計6日間

人数：7名



実習生には主な課題として、

- ①来館者への楽器のガイド（水曜日の展示室公開日、日曜日のオープンキャンパスで実施）
- ②講堂展示の企画、準備、展示作業

を設定した。ガイドについては、実習生ごとに担当する楽器を決め、実習生各自が楽器について調べて解説を作成し、フィードバックを経て来館者対応に臨む、というプログラムとした。また、講堂展示は

実習生が展示ケースの大きさや講堂の温湿度を考慮しながらテーマと楽器を決め、楽器の状態の点検、治具とキャプションの作成、展示替え作業をおこなう構成とした。実習生は苦勞しながらもガイドや展示の実習に積極的に取り組んでいた。

申し込みが定員を超えたものの、提出された作文課題に基づき、多少定員を超えてもなるべく多くの実習生を受け入れるよう努めた。多くの学生に実習の機会を設けられた一方で、各実習プログラムにかかる時間が伸びてしまったり、狭い収蔵庫に対し入室する人数が多くなってしまったりなど、反省点もあった。次年度は受け入れ人数を定員以内とし、実習内容の改善を検討する。

## 9. JPTA 第 37 回全国研究大会

日本ピアノ教育連盟（JPTA）の全国研究大会が国立音楽大学で開催されるにあたり、楽器学資料館の展示室見学ツアーの依頼があった。大会研究テーマが「ショパン演奏における美の探究」であったことから、ショパンに関連のあるメーカーのピアノを中心に紹介する実演付きガイドツアーを実施した。演奏と解説は、本学創立 100 周年記念事業の「くにおんフォルテピアノサマースクール」でも受講生のサポートをしてくださった、本学卒業生の飯島聡史先生にお願いした。

JPTA 第 37 回全国研究大会は計 2 日間にわたって開催された。ガイドツアーは各日 2 回おこない、このほかに自由見学が可能な時間も設けた。

8 月 30 日（土）

10:00～12:00 自由見学  
13:00～13:40 ガイドツアー  
14:00～17:00 自由見学  
17:20～18:00 ガイドツアー  
来館者数合計 50 名



8 月 31 日（日）

10:00～10:40 ガイドツアー  
11:00～13:00 自由見学  
14:00～14:40 ガイドツアー  
15:00～18:00 自由見学  
来館者数合計 72 名



ガイドツアーでは、フォルテピアノの構造や特徴を知ることが作品解釈のヒントになることを、飯島先生が実例を挙げながら解説なさった。参加者の方々からはリアクションを多くいただき、大変好評なガイドツアーであった。また、自由見学時間には、当館の展示やコレクションに多くの方から関心を寄

せていただいた。

## 10. おわりに

以上の活動のほか、一般の方や音楽関係者による団体見学、中学校や高等学校の総合学習での見学にも随時対応した。さらに「ピアノフェスティバル」や「サマー・ミュージック・セミナー」のような大学主催の講座においても、所蔵楽器を用いた見学・試奏のプログラムに協力した。

次年度以降も引き続き、このように展示や教育普及活動に取り組んでいく所存である。

## 1. はじめに

楽器学資料館では、「音楽研究に必要とされる楽器に関する資料を整える」という方針に基づいて、本学の教育・研究への活用が見込まれる資料を収集している。収集対象とする資料は、楽器そのものに限らず、楽器に関連したその他の資料も受け入れる場合がある。

楽器や関連資料の寄贈の申し出があった場合は、製作者、製作年、状態などを確認し、所蔵状況や収蔵場所をふまえて当館で教育・研究に活用できる見込みがあるかを検討し、受け入れの可否を判断している。収集は寄贈に限らず、教育・研究のため新たに楽器を購入する場合もある。

本項目では、2025 年度に寄贈いただいた、または購入した資料について報告する。

なお、前年度の『楽器コレクション管理資料集 8 活動報告編 2024 年度版』に記載していない資料として、1795 年頃のアントン・ワルター製グランドピアノ（太田垣至 2025 年複製、2025 年 3 月 31 日受入、登録番号 2621）があるが、この楽器の詳細については、本書 6～9 ページ「くにおんフォルテピアノの製作について」を参照いただきたい。

## 2. 寄贈楽器

### 2.1 リードオルガン

登録番号 2622

地域：日本、横浜

製作者：西川風琴製造所

西川風琴製造所による 1910（明治 43）年製の小型のリードオルガン。西川風琴製造所は、明治 17 年からリードオルガン製造を始め、のちにピアノも製造した、日本の洋楽器製造の黎明期を代表するメーカーのひとつである。

リードオルガンは基本的に製造番号が楽器内部に記載されているため、製造年代が容易にわからないものが多い。しかし、一緒に寄贈いただいた購入当時の保証書により、この楽器の製造番号と製造が完了している年代が明らかである。また、足が折り畳める仕様の日本製リードオルガンはこれまで所蔵がなかった。音を出せる状態であることもふまえ、この楽器の受け入れを決定した。



## 2.2 バスル

登録番号 2623

地域：ドイツ（推定）

製作者：Joseph Thomas Klotz（推定）

元 NHK 交響楽団員のコントラバス奏者、故・田中雅彦氏が所有していた小型のコントラバス。本学招聘教授の志賀信雄先生と、コントラバス奏者の久保田亨氏が、田中氏のご遺志を継ぎ当館への寄贈をお申し出くださった。

この楽器は田中氏が 1975 年頃ベルリンで購入した。その際、Klotz の楽器であると説明があったという。当時は楽器の各パーツがバラバラの状態であったため、無量塔蔵六（むらたぞうろく）氏の工房で組み立てと修復をおこなったとのことである。製作者によるラベルは残っていないが、楽器内部に 19 世紀のミュンヘンでの修復ラベルが確認できる。

これまで楽器学資料館ではバスルの所蔵が無かったことと、この楽器は演奏が可能な状態であり、試奏やレクチャーコンサート等でも活用が見込まれることから、コントラバスの歴史を学ぶための教育的資料として寄贈を受け入れた。



### 1.3 ハープツィター

登録番号 2624

地域：ドイツ（マルクノイキルヒェン）

製作者：Horst Wuensche

42 弦のハープツィター。ツィター、マンドリンの製作で一流と高い評価を受ける工房の製作である。楽器学資料館では類似する楽器として 35 弦の小型ツィター（登録番号 1661）を所蔵しているが、この楽器は経年劣化のため試奏ができない状態である。対して、今回寄贈を受けた楽器は保存状態が良好で、ピックおよび全ての弦の替え弦もあわせて寄贈いただいた。展示にとどまらず、学生への試奏体験にも活用が見込まれるため、寄贈を受け入れた。



### 1.4 尺八

登録番号 2625, 2626

地域：日本

製作者：調査中

一尺八寸管と一尺六寸管、計 2 点の都山流の尺八。大正末期～昭和初期の製作と考えられる。

当館にはすでに多くの尺八を所蔵しているが、戦後に製作さ



れたもの、あるいは製作年代が不明のものが多くを占める。昭和初期の尺八は1935年製の尺八（登録番号1647）を所蔵しているが、琴古流の二尺管であり、特徴の異なる楽器である。

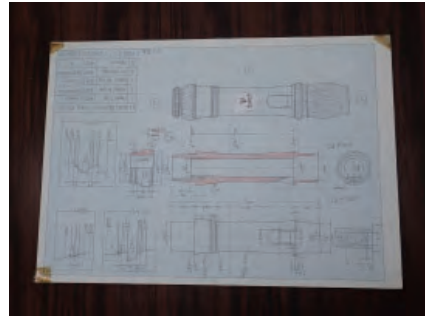
戦前の尺八研究に役立てられることが見込まれるため、これらの楽器の受け入れを決定した。

### 3. 寄贈を受けた楽器関連資料

#### 3.1 リコーダーの図面

リコーダーおよび横笛奏者、故・上杉紅童氏が生前に作成した計27点の図面。1960～1980年代頃に描かれたものであり、「Friedrich von Huene」「Bressan」「Denner」などのモデル名や「for Zenon」などが付記されていた。

上杉氏は、小学校音楽教育でリコーダーが正式採用された際に、図面を作成し、樹脂製リコーダーの試作・開発・普及に協力した人物で、NHK教育テレビ「ふえはうたう」の初代講師を務めたことでも知られる。当該図面は黎明期の日本のリコーダー製造にかかわる貴重な資料であると判断し、受け入れを決定した。



#### 3.2 コルネッティーノのマウスピース

スイスのHistorisches Museum Basel（バーゼル歴史博物館）に所蔵されている、A=466のコルネッティーノのマウスピースの複製。素材は象牙である。フラウト・トラヴェルソの製作者で、コルネットのマウスピースも手がける、中川隆氏による製作。

バロック時代のコルネット（ツィンク）の演奏や製作を学ぶ本学学生の望橋聖さんが、演奏研究のためにマウスピース製作を依頼した際、接続部に小さな亀裂が生じたため新たに製作したマウスピースとともに受け取ったもの。演奏には支障がない状態であり、楽器学資料館で教育的に活用してほしいとの申し出があり、寄贈を受け入れた。



### 4. 購入楽器

#### 4.1 リンベ

モンゴル国の横笛。馬頭琴と同様に、モンゴルの民謡「オルティン・ドー」の伴奏に用いられる。独特な循環呼吸法での演奏は、ユネスコの無形文化遺産に登録されている。楽器学資料館ではこれまでリンベを所蔵していないことから、学生がモンゴルの音楽文化を学べるよう、展示や試奏に活用できるリンベを購入した。2026年度はラウンジ展示「日本と世界のうたと楽器」において展示する予定である。

### 巻末 活動報告概略

#### 楽器学資料館 2025年度活動報告概略

#### 1. 開館日数・来館者数

◆2025年度（2025年2月13日現在）

展示室使用日 日数：152日

うち展示室公開日 日数：39日（通常公開日：35日／臨時公開日：4日）

来館者数：3435名（学内：1724名／学外1711名）

「楽器の10分講座」開講：65回

#### 2. 新規登録資料

◆2024年度

登録番号2621 Anton Walter c.1795（太田垣至 2025年複製）グランドピアノ（2025年3月受入）

◆2025年度

登録番号2622 西川風琴製造所製 リードオルガン（2025年4月受入）

登録番号2623 バスル（2025年12月受入）

登録番号2624 Horst Wuensche製 ハープツィター（2026年2月受入）

登録番号2625 尺八 [一尺八寸管]（2026年3月受入）

登録番号2626 尺八 [一尺六寸管]（2026年3月受入）

登録番号2627 リンベ（2026年3月受入）

#### 3. 展示記録

◆2025年度

企画展示：「ピアノ製作者たちの偉業 ～古典派の作曲家が求めたピアノと音楽～」（2025年4月16日～2025年7月30日）

「楽器とめぐる明治・大正・昭和」（2025年10月1日～2026年2月4日）

ラウンジ展示:「音大生なら知っておきたい世界のアンサンブル」(2025年4月1日～2026年2月12日)

講堂展示: 1階『伝える』楽器」(2025年5月～2025年10月)

「くらしのなかの音あそび」(2025年10月～2026年5月予定)

2階「一柳慧のグランドピアノ」(2025年4月～)

#### 4. イベント開催記録

##### ◆2025年度

くにおんフォルテピアノお披露目コンサート ～ フォルテピアノでの演奏体験を現代のピアノ演奏に活かす～

開催日: 2025年4月18日(金)

会場: 講堂小ホール

出演者: 久元 祐子 (フォルテピアノ、ピアノ、お話) / 永峰 高志 (ヴァイオリン) / 長島 剛子 (ソプラノ)

トマシュ・リッテル くにおんフォルテピアノリサイタル

開催日: 2025年6月27日(金)

会場: 講堂小ホール

出演者: トマシュ・リッテル Tomasz Ritter

子ども見学会 2025 「リコーダーでバロック音楽をたのしもう！」

開催日: 2025年7月24日(木)

会場: 楽器学資料館

講師: 向江 昭雅 (リコーダー) / 坪田 一子 (ヴィオラ・ダ・ガンバ) / 長久 真実子 (チェンバロ)  
/ 楽器学資料館学芸員

くにおんフォルテピアノサマースクール

[公開レッスン]

開催日: 2025年8月25日(月)～28日(木)

会場: 楽器学資料館

講師: 平井 千絵

[修了演奏会]

開催日: 2025年8月29日(金)

会場: 新1号館142 オーケストラスタジオ

出演者: サマースクール受講生 / 平井 千絵 / 飯島 聡史

フォルテピアノと探求する古典派のピアノ作品

開催日: 2025年12月11日(木)

会場: 講堂小ホール

出演者: 平井 千絵 (演奏、解説) / 太田垣 至 (楽器解説)

#### 5. 教育用映像撮影報告

##### ◆2025年度

メディアプロジェクト サバルドラム

撮影日: 2025年5月16日(金)

出演者: ワガン・ンジャイ・ローズ / ヤクバ・ジャバテ / モハメド・ンジャイ・ローズ / 内藤太郎

メディアプロジェクト トンコリ、ムックリ

撮影日: 2025年6月13日(金)

出演者: 千葉伸彦 (トンコリ) / 恵原詩乃 (ムックリ)

## 国立音楽大学 楽器学資料館

所在地 東京都立川市柏町 5-5-1  
国立音楽大学 4号館 1階  
TEL 042-535-9574  
事務室対応時間 平日：午前9時00分～午後5時00分

館長 三浦 雅展（本学准教授）  
鍵盤楽器  
メンテナンス 太田垣 至（本学講師）  
学芸員 不動 真優  
宇井 紗也香  
武田 有里  
庶務担当 仲川 咲  
資料担当 後閑 綾香

### 所蔵資料

- I 楽器  
楽器点数 2596点（2026年3月末現在）
- II 楽器計測資料  
楽器計測図、音響分析グラフなど 約100点
- III 写真資料  
レントゲン撮影写真 98点  
所蔵楽器カラーポジティブ（スライド）約2000枚  
その他
- IV 楽器博物館資料  
収蔵目録、カタログなど各博物館出版物 約700点
- V 書籍  
楽器関連書籍、博物館学関連書籍 約3000点
- VI 音源資料  
LP 2264点  
SP 約20点  
その他
- VII 映像資料  
イベント記録映像 約80点  
教育用映像 約100点  
参考資料映像（市販品他） 約100点

### 出版物

- I カタログ  
The Collection of Musical Instruments 1（1996）  
The Collection of Musical Instruments 2（1996）  
ピアノ 国立音楽大学楽器学資料館所蔵目録
- II 楽器資料集  
1. Ud・琵琶・Lute  
2. 琴 Zither  
3. 弓奏弦楽器

- Bowed Stringed-Instruments
- 4. 有棹弾奏弦楽器  
Plucked Stringed-Instruments with Neck
- 5. Harp・Lyre
- 6. 喇叭 Horn
- 7. 有簧管楽器  
Reed Instruments
- 8. Bagpipe
- 9. 笛 Flute
- 10. 太鼓 Drum
- 11. 琴 Zither II'（改訂増補版）
- III 楽器コレクション管理資料集  
1. イギリス編  
2. 活動報告編 2018年度版  
3. 活動報告編 2019年度版  
4. 活動報告編 2020年度版  
5. 活動報告編 2021年度版  
6. 活動報告編 2022年度版  
7. 活動報告編 2023年度版  
8. 活動報告編 2024年度版  
9. 活動報告編 2025年度版
- IV 日本国内の伝統楽器に関する調査報告  
1. 北海道  
2. 東北地方  
3. 関東地方  
4. 中部地方
- V CD  
Seven Broadwoods

楽器コレクション管理資料集 9 活動報告編 2025年度版

2026年3月31日 発行

編集兼 国立音楽大学 楽器学資料館  
発行 〒190-8520 東京都立川市柏町5-5-1  
国立音楽大学4号館1階

印刷所 株式会社グラフィック  
〒612-8395 京都府京都市伏見区下鳥羽東芹川町33(本社)